

青山学院大学

ジェンダー研究センター年報

第 1 号

2022年3月

Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies at Aoyama Gakuin University

青山学院大学附置スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター

青山学院大学
ジェンダー研究センター年報
第1号（2021）

目 次

年報第1号（2021年度）発行にあたって	申 恵丰	1
ジェンダー研究センター 2021 年度活動記録		
ジェンダー研究センター設立記念講演会		
「ミッション×女子教育×ジェンダー」ー戦前キリスト教女子教育から現代へー より		
女子ミッション・スクールと男女交際・「愛ある結婚」の誕生	小檜山 ルイ	6
近代日本における女子高等教育への道		
ーメソジスト女性宣教師と日本人教師から探るー	大森 秀子	18
永井英子の信仰・愛・人生 ー自分を貫くということー	小林 瑞乃	36
寄稿エッセイ		
[研究ノート] フランク・オハラ		
——「ストーンウォールの反乱」以前の詩人——	金田 由紀子	56
調査報告		
青山学院法人役員および青山学院大学教員の		
ジェンダー・バランスの現状	寺尾 敦	66

年報第1号 (2021年度) 発行にあたって

青山学院大学附置スカーンメーカー記念ジェンダー研究センター
センター長 申恵丰



本センターは、青山学院大学が、青山学院女子短期大学で行われていたジェンダー研究を受け継ぎ、青山学院における女子教育の伝統を新たな時代に継承するとともに、本学におけるジェンダー研究の遂行及びジェンダー教育の発展を通じて、青山学院及び社会におけるジェンダー平等及び性の多様性の尊重に貢献するために、2021年4月に設立されました。副センター長に、女子短期大学の副学長でいらした趙慶姫先生、そして運営委員と実務委員には各学部から多彩な専門性をもった先生方に就いていただき、初年度となる今年度からすでに様々な活動を展開しています。

この年報では、1年間の活動記録とともに、2021年7月17日にオンラインで開催された設立記念講演会「ミッション×女子教育×ジェンダー ―戦前キリスト教女子教育から現代へ―」での3名の講師の方々のご講演内容、及び、センターが委嘱したアソシエイト（協力者）の一人である経済学部・金田由紀子教授の寄稿エッセイを収録しました。また、本センターは「青山学院及び社会における」ジェンダー平等と性の多様性の尊重に貢献することを目的としており、青山学院の組織内のジェンダーバランスにも注目しています。本年報では、その手始めとして、実務委員の一人である寺尾敦・社会情報学部教授によるジェンダーバランス調査を掲載しました。

青山学院に集うすべての生徒・学生と教職員が、ジェンダーをめぐる偏見や不条理にとらわれず自分らしく生き生きと学び、仕事をし、他者をも尊重することができるよう、本センターは研究や教育の事業に取り組み、また、広く社会の中でのジェンダー平等と性の多様性の尊重に向けた発信をまいります。今後とも皆様のお力添えを何卒よろしくお願い申し上げます。

ジェンダー研究センター 2021年度活動記録

<2021年>

5月9日 設立記念シンポジウム「大学ジェンダー研究機関のこれまでとこれから」

6月26日・7月3日・7月10日

エンパワーメントプログラム「第1回造形ワークショップ [版画／織]」

7月17日 設立記念講演会「ミッション×女子教育×ジェンダー ―戦前キリスト教女子教育から現代へ―」【本年報に講演内容を掲載】

7月23日 It's just our family上映会

「家族って何？トランスジェンダーの青山学院大学教員とその家族が語る」

9月～2022年1月

青山スタンダード科目「いのち・女性・社会」企画及び実施

9月22日（ほか各学部教授会開催日）

全学FD委員会・ジェンダー研究センター共催FD研修会

「教育における人権―ジェンダーの観点から」

9月25日 Aoyama Gakuin Global Week

卒業生トーク「アジアで花咲け！今とこれから」

10月2日～12月18日（土曜日全8回開催）

エンパワーメントプログラム「女性のためのマナーリテラシー講座」

10月2日・9日・11月6日・13日

エンパワーメントプログラム「第2回造形ワークショップ [版画／織]」

11月13日 渋谷区×ジェンダー研究センター連携講座

「渋谷区LGBTQコミュニティスペース #渋谷にかける虹 5年間の歩み」

12月4日・2022年1月8日

「渋谷区LGBTQコミュニティスペース #渋谷にかける虹」出張開催

<2022年>

2月1日 宗教センター・学生相談センター合同研修会「誰もが自分らしくいられるキャンパス作りのために―ジェンダー研究センターとのコラボレーション」においてセンター長が発題

ジェンダー研究センターギャラリー 2021年度展示記録

- | | |
|-------------------|--|
| 4月2日～5月8日 | 設立記念展「ジェンダー研究センターができるまで」 |
| 5月17日～6月19日 | 短大コレクション展「アフリカの布・アフリカの道具」 |
| 6月22日～7月9日 | 「31st おーる あおやま あーと てん'21」＊ |
| 7月12日～7月31日 | 設立記念展「ミッション×女子教育×ジェンダー II」 |
| 9月17日～10月9日 | 「社会人のための造形座」作品展 |
| 10月12日～11月6日 | 「久保制一 退任記念展」＊ |
| 11月9日～11月27日 | 「青山学院創立念所蔵作品展」
—短大ギャラリー・女流作家展を振り返る— |
| 11月30日～12月8日 | 「Art クリスマス AOYAMA in Gallery」＊ |
| 12月10日～2022年1月19日 | 「ジェンダーを知るためのブックレビュー展」 |
| 1月21日～2月3日 | 子ども学科卒展＊ |

(＊は、ジェンダー研究センターの企画による以外のもの)

ジェンダー研究センター設立記念講演会

「ミッション×女子教育×ジェンダー」
—戦前キリスト教女子教育から現代へ— より

女子ミッション・スクールと男女交際・「愛ある結婚」の誕生

小檜山 ルイ

本日は、「女子ミッション・スクールと男女交際・「愛ある結婚」の誕生」というタイトルでお話します。私は、女性宣教師の女子教育の中で日本社会一般に最も大きなインパクトを与えたのは、「愛のための、あるいは、愛ある結婚」の紹介・導入、一夫一婦制の確立への関与であったと考えています。ご存知のように、日本では一夫多妻が容認されていました。一夫一婦を旗印とするキリスト教は、その状況に介入し、「西洋基準の近代」の一端を日本が長い間かけて取り入れた、その過程の端緒を開いたと考えています。板垣退助は、彼にとって「道徳の小なるもの」である男女関係の規律を弱めてくれれば、受洗することも考えると発言したと伝えられます。日本人にとって、一夫一婦の規律は、確かにキリスト教の際立った特徴の一つでありました。

本日のお話は前半と後半に分かれています。前半で、アメリカにおいて19世紀前半に成立した「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」＝「愛のための、愛ある結婚」の理想はどのようなものであったかをお話します。特に共和制そして民主制というアメリカの政体との関係において、そのような結婚がどのように宗教と結びついて成立したのか、結婚の結果として生まれる「ホーム」とはどのようなものであったのかを説明します。宣教師が男女関係をめぐるどのような思想的、实际的システムをもたらしたのかを理解するためです。後半では、1870年代から1890年代までを視野に、宣教師は日本の男女関係にどのような介入を行ったかを説明いたします。

「愛ある結婚」の理想は

どのようなものであったか

スライドは、1910年の時点で、日本におけるプロテスタントの宣教師の約75パーセ

⑤1910年日本における プロテスタント伝道と北米勢力

- ・日本：総数1029人 北米771人 英191人
 - ・朝鮮：総数307人 北米254人 英30人
 - ・中国：総数4197人 北米1812人 英 1065人
 - ・インド：総数4635人 北米1667人 英2016人
- 出典：小檜山ルイ「アメリカにおける海外伝道の文脈とその現在」『日本研究』30（2005年3月）、80-81頁

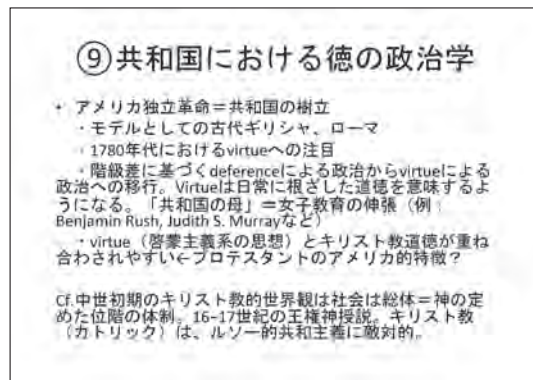
(図1)

⑥海外伝道における女性の勢力(1)

- ・1910年の統計：
 - ・世界全体では、女は男の1.19倍
 - ・北米出自が多い日本では、1.79倍
 - ・イギリス出自が多いインドでは、1.56倍
 - ・欧州出自が多い南アフリカでは、0.7倍
- 出典：小檜山、「海外伝道における」、80頁

(図2)

ントが北米出自であったことを示しています。そして、北米出自が多い日本では、女性宣教師の割合が高かった。1882年までの宣教師の累積数をみると、約60パーセントが女性でした。つまり、日本におけるプロテスタント伝道は主に北米勢力により行われ、しかも、それは女性化していました。100年以上の歴史を持つミッション・スクールに女子校が多い理由の一つです。(図1、2)



(図3)

なぜ、そのようなことが起こったのでしょうか。少し遠回りになりますが、この問題は、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーの成立を理解する上でも重要なので、お話しします。まず、「共和国における徳の政治学」というスライド(図3)です。イギリスの植民地だったアメリカは1775年に始まる戦争によって独立し、共和国を樹立します。それは、フランス革命に先立つ市民革命でした。それで、王侯貴族という身分が否定されたわけですので、身分に基づくデファレンス(敬意)によって権力が支えられ、集約されるという構図は崩れていきます。代わりに権力基盤として重要になったのが「徳」です。つまり、「徳」を基軸に、権力を構築していく。共和国の市民は、自分勝手な欲望ではなく、共同体全体の利益を考えると徳を以て、またそれを基準に、自分たちの中から政治的指導者を選び、権力の集約と統治を成すというわけです。

独立戦争にはほぼ決着がついた1780年代、合衆国の指導層は、古代ギリシャ・ローマの共和制に建国のモデルを求め、特に古代の市民に求められたvirtueに注目が集まりました。Virtueのvirは男らしさを意味し、戦士として自らの命を擲って共同体を守る勇気がvirtueでした。しかし、アメリカでは、より日常に根ざした道徳を指すようになります。「市民」を「戦士」で特権階級に属す人々に限定できない状況がアメリカにはあったからだと思います。初期共和国の指導者は大プランテーションを経営し、奴隷を持つ人も多かったことは周知のことですが、革命における戦士の主力は民兵でしたし、女性も戦時協力しました。独立戦争は、総力戦の奔りだったのです。そして、virtueは生まれつきのものではなく、教育を通じて獲得するものとされました。そこで、女性は、特に幼児、子供にvirtueを育てる役目を負う、「共和国の母」だとされました。同時に、virtueは、キリスト教道徳に接合されて理解されていきます。

この接合は、1790年代から1840年代まで続いた第二次大覚醒を通じて、確固たるものになった…というか、大覚醒を通じて、virtueはキリスト教道徳に置き換わっていったと考えます。第二次大覚醒は南西部に始まり、東部沿岸都市部、そして、北部内陸部へと広が

りました。リヴァイヴァルで活躍したのが、メソジストとバプテストです。両教派は、下層から中流の下くらいの人々を中心に信徒を獲得していきました。キャンプ・ミーティングは、フロンティア的状况の中で、一回につき1-2週間も続いた一種のエンタテインメントです。異なる説教者が次々と演題に立ち、集団回心が起こりました。メソジストのサーキット・ライダーは、悪天候をものともせず、集落を巡回し、辻説教をして、教会の核を作ると、次の村に移動しました。彼らの多くは、無学の若者で、火の玉のような信仰に突き動かされていたと言います。そして、このような説教をしました。

学歴は宗教じゃございません。勉強したって、聖霊の力はもらえません。…聖ペテロは漁師でございました—イエール大学に通ったなんてお思いで？ 兄弟姉妹の皆さん、もちろん、そんなことはございません。主がエリコの壁を吹き飛ばそうとなさったとき、真鍮のラッパとか、磨きがかかったフレンチホルンなどお使いにならなかった。…神様は羊の角を一素朴で、自然な、羊の角を育った形のまま、お使いになった。ですから、みなさん、霊的なエリコの壁を吹き飛ばそうとなさるとき、神様は、…スマートで礼儀正しい、大学で勉強したジェントルマンは使いません。私のように、素朴で、自然な羊の角のような男をお使いになるんで。(Samuel Goodrich, *Recollections of a Lifetime* (1856) as quoted in 小檜山「女性と政教分離」.)

つまり、第二次大覚醒の一側面は、平等促進運動なのです。回心とは極めて感情的な経験を通じて、神との直接的なつながりを確信するものです。その経験がなければ真のクリスチャンとは言えない。つまり、回心を通じ、人は、学歴や財産を飛び越えて、回心なしの学歴による牧師を凌駕する「真のクリスチャン」になれるのです。そして、「真のクリスチャン」は、日常レベルでは、道徳的優位性によって自らを証するはずなのです。つまり、教育も財産もわずかな、下層に属しかねない人々が「中流」の成り上がる道筋を回心は準備するわけです。この回心のダイナミズムは、第二次大覚醒まっただ中の1830年代までに、市民権が拡大し、民主主義社会が確立していったことと大いに関係していると思います。つまり、キリスト教に帰依した道徳的な人々は、立派な市民＝主権者となり、民主主義の安定的定着を支えました。アレクシス・トクヴィルに言わせれば、「合衆国では主権者が信心深いから、偽善が一般化せざるをえない。にもかかわらずアメリカは、いまなお人の魂を真に動かす最大の力をキリスト教が保持しているところである。(中略) 宗教は習俗を導いており、家庭を律することを通じて国家を律することに預かっている」(トクヴィル『アメリカのデモクラシー』より) というわけです。ここで、家庭がもちだされていることに注意して、次の説明に移ります。

すなわち、この第二次大覚醒は、女性化していたということです。この運動における回心者の過半数は女性で、この時期を通じて、日曜日の教会の出席者はほとんど女性になり

ました。これは、一つには、アメリカで政教分離が確立したことと関係があります。最後まで公定教会（税金でまかなわれる教会）を維持したマサチューセッツ州がこの制度をやめたのは1833年です。そうすると、教会はヴォランティア団体の一つとなり、役所の一部として機能するものではなくなる。つまり、行政や政治との距離が一段と大きくなって、男性にとっての魅力は低下します。他方、女性は、独立戦争への協力にもかかわらず、成立した共和国において、選挙権も財産権も得られませんでした。女性は、したがって、男性とは異なる道筋、すなわち、教会の伝統的権威とキリスト教道徳に立脚して、権力にアクセスしようとしていました。19世紀アメリカで良くいわれたように、女性は「道徳の守護者」として家の内外での発言力を高めようとしたのです。第二次大覚醒に女性の参加が目立って多かった理由の、少なくとも一つはここにあると思います。教会は女性化し、ある研究によれば、牧師は専ら女性の会衆を相手にせざるを得ず、そのため説教のトピックは女性の関心に寄り添い、しまいには牧師の容姿も女っぽくなりました。

女性が第二次大覚醒に参加してクリスチャンになることには、さらにもう一つの意味があったと思います。アメリカ独立革命前後は、社会的混乱と流動性の高まりによる村落共同体の弱体化、また、新時代の到来による親の子供に対する支配力の低下等により、配偶者選択における当事者の自由は高まりました。また、革命後の共和国においては、経済や生産性の顧慮ではなく、愛情に基づく結婚、より平等な夫婦関係が希求されました。「互いに尊敬し、互いに友情を分かちあい、互いに信頼し、互いに耐え忍ぶ」（Judith S. Murray）夫婦という理想です。結果、皮肉にも、婚前妊娠が急増しました。18世紀前半までは、妊娠して結婚する女性の割合は8－10パーセントだったのが、1761年から1800年では全体の3分の1にまで増えたと推定されています。当時、婚前妊娠は女性を著しく不利な立場におきました。子供の実父に逃げられた場合、「父なし子」を生むことになります。そうすると、女性にはまともな経済機会はほとんどありませんでしたから、共同体が母子を援助しなければならないかもしれません。その数を抑えるため、「父なし子」は、ハラメントを受けました。第二の選択肢は、妊娠していることを承知で結婚に同意する男—多くは子供をたくさん持つ寡—に嫁ぐことで、いきなり大家族の面倒をみることになります。クリスチャンになって、純潔の徳を内面化し、男と向き合えば、このようなリスクを回避できます。婚前交渉を拒否することは、当時は女性の利益になりました。そして、多くの女性がクリスチャンの純潔道徳を守れば、それがノームになります。1830－40年代にニューヨーク州を中心に広まった女性の団体、「道徳改善会」は売買春の取り締まりに取り組みましたが、運動を通じて、会員女性やその娘たちに純潔規範を植え付けたことが重要でした。

1830年代には、「愛ある結婚」のプロトコルが固まりました。それは、婚前交渉なしに、プラトニックなレベルで若い男女はつきあい（複数とつきあう事は許される）—つきあい方にもルールがありました—、時間がないので、今日は省略—、プラトニックな愛情を確

かめ合うことのできれば、当事者の双方が結婚を決断し、結婚後、初めてセックスし、愛に基づく「ホーム」を築くというものです。1840年代までには、婚前妊娠率は独立革命前のレベルまで下がりました。

「愛ある結婚」の内実は「ホーム」によって示されました。第二次大覚醒が始まった1790年代はアメリカで産業革命が始まった時代でもありました。資本主義の発展は、家内労働を外部経済化し、職住分離を進めていきます。オイコスが解体され、男性は外で働き、女性は家に残る。つまり家は女性が司る空間となり、その人間性のすべてが投影されるはずの「ホーム」となります。家事は女性の「愛」の表現であり、だから無償です。教会と結んだ「道徳の守護者」である主婦かつ母は、教会の出先機関となった「ホーム」でキリスト教道徳を家族に涵養します。その道徳は、勤勉と節約という、ヴェーバ的資本主義の精神であると同時に、弱き者に手を差し伸べるという利他性を養うものでした。つまり、資本主義の進展、競争の激化による格差拡大に対処し、ひずみを和らげる機能を持つものでした。「道徳の守護者」として「ホーム」を仕切る女性は、選挙権を持たず、経済活動からも疎外されていたがゆえに、逆説的にその言説は説得力と影響力を獲得したのです。女性たちはやがて、「ホーム」の外にその影響力を及ぼそうと運動を展開し、それは、社会改革・社会革命へとつながっていきます。

メソジストの女性の間で盛んだった禁酒運動、そして、海外伝道はこの種の運動の例なのです。もう一言付け加えますと、「レディ・ファースト」とはアメリカにおいては、女性の道徳的権威（権力）に対して示されたデファレンスのしぐさです。こうして、「ホーム」は、民主主義と産業革命、資本主義が同時進行する、ダイナミックであると同時に混乱の多いアメリカ社会の秩序の要となるはずのものでした。トクヴィルは次のように言っています。「[[キリスト教は] 婦人の魂を絶対的に支配しており、習俗をつくるのは婦人である。…アメリカ人は政治の世界の喧騒から家庭に帰ると、秩序と平安のイメージに直ちに接する。…ヨーロッパ人が社会を乱すことによって家庭の苦悩から逃れようとするのに対して、アメリカ人は秩序を愛することを家庭生活で身につけ、やがてこの秩序への愛を国家の統治にもちこむ。』（『アメリカのデモクラシー』より）

こうした「ホーム」を維持することが、いかにたいへんであったか、想像がつくと思います。「ホーム」は女性に権力を与えたけれど、重い義務も負わせました。しかし、「愛のための結婚」では、女性は自ら選んで、結婚するわけです。だから、それにコミットする。トクヴィルはこれを次のように描いています。アメリカの女性は「まだ子供時代を抜けきらぬうちから、自分の頭で考え、自由に喋り、一人で行動する。…[しかし] 女性の独立は婚姻の絆の中に消えて帰らない。…妻はどこにもましてきつい義務の下におかれる。…夫の住まいで修道院の中のように暮らす。…彼女は独立の生き方をする中で、自らそうすべき時が来れば抵抗なく不平も言わずに、独立を捨てる勇気を身につけたとってよい。…結婚すれば何が待っているか予め教えられ、自分で自由に考えてその制約に身をゆだねる。自分で選んだからこそ、勇気をもって新たな境遇に耐えるのである。…私はしばしば

荒野の涯で、ニューイングランドの大都会の洗練の中で育った若い娘が、…森の中の掘っ立て小屋に移住してきたのに出会ったものである。興奮も孤独も倦怠も彼女らの勇敢な精神を挫くことはなかった。顔つきは変わり、やつれては見えだが、目つきはしっかりしていた。悲し気ではあったが、毅然としていた。」(『アメリカのデモクラシー』より)

このような敬虔な女性が差配する「ホーム」を保持していることは、19世紀アメリカの中流に属す条件の一つであったことを指摘したいと思います。そして、このような女性を生み出す女子教育が実践されました。その典型は1837年に設立されたメアリ・ライオンのマウントホリヨーク・セミナリです。この学校は多くの宣教師を輩出し、何人かの女性宣教師は、日本のマウントホリヨークの設立を目指しました。本日は、そこでの教育システムの紹介は時間の関係で省略します。

宣教師は日本の男女関係にどのような介入を行ったか

19世紀前半に成立したこのようなアメリカ合衆国の社会構造は、19世紀後半になると多くの女性宣教師を海外に送り出しました。最初に申し上げたように、アメリカ発の海外伝道は女性化しており、日本ではそれが明確に女性宣教師の数となって表れました。メソジストは特に女学校を多く作っています。1880年代までに宣教師が創立した女子教育機関で、現代まで残っているものは約29校ありますが、カナダ・メソジストを含めると、そのうち10校がメソジスト系です。

アメリカ出自の女性宣教師たちは、「愛ある、愛のための結婚」と「ホーム」のイデオロギーを内面化しており、学校を疑似「ホーム」として運営することを目指しました。だから彼女たちは例外なく、寄宿学校を望んだのです。生徒の全生活を掌握し、「ホーム」という19世紀アメリカの基督教の砦を経験させ、生徒がそれを体得することを目指しました。そうすれば、生徒はクリスチャンにならないわけがなく、クリスチャンの女性がクリスチャンの男性と結婚すれば、「ホーム」が再生産できるのです。むろん、知性を磨くことにも熱心でしたが、それは「ホーム」の主権者としての女性の権威を高めることにつながったからです。

このような女子教育の構想を宣教師が抱いていた証拠は、メソジストに限らずいくつも見つけることができます。しかし、今日は時間がないので、例をメソジストに限り、その初期については、女性宣教師たちが、海岸女学校を、“Tokyo Home”と呼んでいたことを指摘するにとどめます。

1880年代の資料を見ますと、「ホーム」の運営者とし



(図4)

Elizabeth R. Bender

東京英和女学校校長1891-1895

青山女学院院長1895,1902-1907

での技能を教えることが、海岸女学校の教育の目的として明確に意識されていたことがわかります。「裁縫と料理が婦人伝道局の東京の学校では教えられています。生徒を良い学徒、有能なキリスト教の働き手とするだけでなく、やがて主婦、善い妻・母となる、女性らしい女性にするためです」(*Minutes of the Woman's Conference, 1886*)とあります。別の資料には、「家庭の領域を形成することが女子教育の目的です。日本人は、キリスト教国におけるホームの生活がどのような要素で成り立っているか分かっていないからです。女性たちは、キリスト教だけでなく、家政のすべての原則を十分に教えられなければいけません」(*Minutes of the Woman's Conference, 1886*)とあります。

1899年という遅い時期になっても、エリザベス・ベンダ(図4)が、女学生は、寄宿学校の後に「クリスチャン・ホーム」を据えるべきだと主張しています。当時生徒が結婚を避ける傾向にあったのを嘆き、宣教師は、生徒にふさわしい相手を見つけてやるべきではないか、とさえ述べています(*Minutes of the Woman's Conference, 1899*)。

クリスチャン同士の結婚を求める声は男性側からも発せられました。同志社の宣教師デイヴィスは、1877年、同志社で「訓練された50人の男性」が異教徒の妻を迎えると、「キリスト教の愛の明るい事例」を提示できないと訴えました。この訴えは『異教徒の女性の友』に転載されました。

こうして生徒の結婚を重視した宣教師が直面した日本人の間の男女関係、結婚の慣習は、アメリカのそれとは様相を異にしていました。階層や地域によって多様性があるので、一概には言えませんが、おおよその傾向として、まず、日本にはプラトニックな愛と性愛の区別がありませんでした。両者は切り離せない状態で、異性間の情熱的な関係を定義していました。そして、その情熱は移ろいやすい「浮気」でした。遊郭等で育まれた「色の文化」は、「浮気」を前提に、遊戯としての男女関係を提供していました。一方、結婚はオイコスの命運がかかる、真剣な決断です。それを、「浮気」に依拠して決めるのは、とんでもない話です。だから基本的に結婚は親や親類による経済的判断が最優先の決断でした。一方で純潔規範は弱く、離婚再婚は比較的自由でした。一夫多妻が容認されており、男性は、財力さえあれば、「浮気」を満たす妾囲いや売買春が許されていました。他方で、女性が嫁ぐ「家」の中では妻に主導権がなく、妻は夫や夫の家族に仕えることが期待されました。この状況の中で、女は二種類に大別されます。母性を付与されるが、セクシュアリティは付与されない「地女」と、母性は否定されるけれど、セクシュアリティを過剰に付与される「遊女」です。

この状態を、女性宣教師は厳しく批判しました。フローラ・ハリス(図5)等による批判をかいつまんで紹介すると次のようになります。内縁関係が多い、下層の女性は純潔を知らない、不貞が許されている、売春婦は親孝行で、妾や愛



(図5)
Mrs. M. C. Harris.

人は軽蔑されておらず、淑女のような愛人もいる、大勢の売春婦の写真を見せ、珍品として愛でる、吉原を舞台とする心中物語（権八小紫）は、子供でも知っているほど何度も語られる、遊女のchastityが褒められる、結婚は監獄だ、女性に幸せな中年時代はなく、少女から老婦になる、姑は専制君主だから、日本の女は奴隷か専制君主だ、云々（『異教徒の女性の友』（1876年、1877年、1885年））。

この状況への介入は、たやすいものではありません。結婚だけとって、明治前半の日本では、娘は15歳くらいで結婚適齢期になり、親や親類が結婚を決めました。すると、大抵、ミッション・スクールを中退し、異教徒と結婚する。宣教師にしてみれば、元も子もありません。唯一阻止する方法は、生徒＝娘自身が親や親類の申し出を拒絶することです。それには、生徒にロマンティック・ラヴ・イデオロギーを吹き込まなくてははいけません。それは、おおらかな性と「浮気」の文化から禁欲と「愛」の文化への移行を促すものです。新しい感情のあり方と、「自分の意志」を行使する勇気を育てることでした。この戦略はある程度成功したようです。1880年代半ばの『異教徒の女性の友』に、「日本のミッション・スクールでは、結婚についてのみ、生徒が「邪悪で理不尽な両親の望み」に反逆する。…異教徒の男性との結婚を拒絶する」という記事の再録があります。

1880年代、ミッション・スクールは、クリスチャンの男女が出会う機会を積極的に提供した形跡があります。1883年、内村鑑三は手紙に「メソジストの女学校から招待状をもらった!!!!すばらしい狩猟のチャンス」と書いています。1886年、87年には、オランダ改革派のフェリスで交際会が開かれ、巖本善治は後の妻島田かし（若松賤子）の『リア王』の朗読劇を見ていました。1888年から1889年頃には、立教、麻布、青山、明治学院という男子ミッションスクールが同盟文学会を形成し、例会に新栄、桜井、頌栄、横浜共立、フェリスの教師や生徒を招きました。島崎藤村が当時を回想しています。「彼も良家の子弟の風俗を学んだ。…軽い帽子を冠り、半ズボンを穿き、長い毛糸の靴下を見せ、輝いた顔付の青年等と連立って多勢娘達の集る文学会に招かれて行き…若い女学生達の口唇から英語の暗唱や唱歌を聞いた時には、殆んど何もかも忘れて居るような気がした。…自分の心を仕合せにするような可憐な相手を探し求めた」（『桜の実の熟する時』より）。

教会も「聖愛」の温床となったとの回想がありますが、今日は省略します。

1883年にメソジストの女学校に招待されて、「狩猟」に行った内村鑑三は同じ年、安中教会で会った同志社女学校などで学んだ浅田タケと恋におち、親の反対を押し切って翌年に結婚します。仲介なしの結婚としては早い例です。半年で破局しました。内村は後年、アメリカ人宣教師の結婚と「ホーム」の形成にかかる努力を批判しました。田舎の教会から出てきたばかりの彼は、「首府基督教のトルコ風呂社会に飛び込み、少女の唱う賛美歌と誰の感情も害しない説教とによってなだめられなでられたのである。…そこでは茶話会と求愛とが自由交際自由恋愛の宗教の証人をえて耽溺されえた」（『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』より）と。また、「かかる幸福なる家庭の…機械的製法を伝えた者は、おもに外国ことに米国宣教師である。…彼らの作り上げし信者に幸福なる家庭を作らしめ

て、そうして幸福なる人を作らんとした。…日本国幾多のキリスト信者は、幸福なる家庭を作らんとして大失望した。…幸福なる家庭とよ！キリストはおのれを信ずる者にそんなものを約束したまわない」(『内村鑑三信仰著作集』20より)と。

私は明治期のクリスチャン同士の結婚例を集めています。集めた中で、最初の例は1878年、メソジストの栗村左衛八(図6)の結婚です。1870年代の例は少なく、新島襄夫妻や木村熊二夫妻のようにキリスト教徒の夫に、妻が追従するパターンが見られます。1840年代生まれのキリスト教徒男性が再婚する場合は、宣教師の女学校から配偶者を得る傾向があります。本多庸一と長嶺サダの結婚(図7)はその例です。1850年代、60年代生まれの男性は、女子ミッション・スクールや教会の女性たちの中に配偶者を見つめますが、大抵仲介者がいます。1870年代生まれの男性は、女子ミッション・スクールや教会の女性たちの中に仲介を経ずに恋愛し、結婚の相手を見つける傾向があります。つまり、1890年代に向けて、配偶者選択における当事者の自由度は増していきます。



(図6)
栗村 左衛八



(図7)
本多庸一・貞子結婚写真
1988年4月

(53)1880年代、90年代のキリスト教徒同士の結婚例

- * 1880年：井深梶之助と水上せき子(アメリカン・ミッション・ホーム、官立東京女学校)
- * 1881年：小崎弘道と岩村千代(女子小学校、救世学校、海岸女学校)
- * 1881年：杉田重次郎と元良よね子(海岸女学校)
- * 日本人牧師とおしゆんさん(遺愛? バイブル・ウーマン、函館初)
- * 1882年：植村正久と山内幸野(フェリス)
- * 1882年：海老名雅正と横井みや(熊本洋学校、海岸女学校、同志社女学校)
- * 1883年：宮部金吾と坂根保子(フェリス)の婚約→1889年に結婚
- * 1883年：藤田九三郎と木崎チカ(横浜共立)の婚約→1886年に結婚
- * 1884年：内村鑑三と浅田たけ(同志社女学校、横浜共立またはプリテン女学校)
- * 1887年：横井時雄(再婚)と柳瀬豊(神戸女学院)
- * 1887年：「えびなきんざぶろう」と大和田しな(遺愛)
- * 1888年：北村透谷と石坂ミナ(横浜共立)
- * 1888年：本多庸一(再婚)と長嶺サダ(遺愛教員)
- * 1888年：木村熊二(再婚)と華子(明治女学校) 1895年離婚
- * 1889年：蔵本善治と島田かし子(フェリス)
- * 1890年：田村直臣と峰尾あけ(桜井女学校)
- * 1890年：志方之善と荻野吟子(東京女子師範卒。私立医学校・好寿院。本郷教会で受洗)
- * 1891年：星野光多と長谷川みね(フェリス)
- * 1892年：蒙永豊吉と松本英子(救世学校、海岸女学校卒、女子高等師範卒)
- * 1894年：星野天和と松井萬(遺愛、明治女学校)
- * 1895年：国木田独歩と佐々城信子(海岸女学校在籍)
- * 1895年：堀卯三郎と潮田うた(海岸女学校、潮田千勢子娘)
- * 1895年：鹿野豊太郎と佐藤福子(明治女学校)
- * 1896年：木村熊二(再婚)と東儀たか(フェリス)
- * 1896年：川井運吉と小平小雪(北星、宮城女学校、明治女学校)
- * 1897年：青柳有美と久保はるよ(明治女学校)
- * 1898年：相馬愛蔵と星良(フェリス、明治女学校)
- * 1898年：布施淡と加藤豊世(フェリス)『加藤豊世・布施淡往復書簡』、2016年
- * 1898年：杉本松男と稲垣鏡子(海岸女学校、東京英和)、兄が決めた婚約者と結婚のため渡米

(図8)

このスライド(図8)は1880年代、90年代のクリスチャン同士の結婚を並べたもので、黄色のマーカーがついているのが、海岸女学校、遺愛(アメリカ・メソジスト系)の出身

者の結婚例9件です。時間の都合で一つ一つを詳しく説明できないのですが、親や親類の結婚の勧めを一旦断ったことがあるのがわかっているのは、元良よね（図9）、おじゅんさん（遺愛）です。仲介者がいるのは、岩村千代、元良、長嶺サダ、松本英子（推定）（図9）、稲垣鉞子の5人です。大和田しな（遺愛）は、男性側が「見初めて」仲介を依頼した、植村正久と似たケースです。岩村、元良、松本の3人は、同志社出身者と結婚しました。教会で結婚式をして（これはアメリカのプロテスタントの慣習



(図9)

松本英子（後列向かって右）元良よね（前列右）
Heathen Woman's Friend vol.XV (1884年3月号)

ではないのですが、日本では初期から教会が使われることが普通だったようです。)、寄宿学校で披露宴をしたのは、岩村、元良、おじゅんさん、大和田、長嶺（披露宴はあったかわからない）の5人です。岩村と元良は同時に結婚しました。それは、海外女学校の新校舎完成直後のことです。また、「北海道で初めてのキリスト教式結婚」をしたおじゅんさんの披露宴も完成したばかりの遺愛の新校舎（図10）で行われました。つまり、これらの結婚は新校舎落成と重ね合わされ、学校の成果と位置づけられたと考えられます。大和田しなの結婚は次のように描かれています。「雑賀アサ（舎監）、長嶺サダ（後の本多貞）、山田よく（トク？1900年遺愛の第二回卒業生）が花嫁と共に入場し、中野ウメ（同第二回卒業生）が結婚行進曲を弾いた。80人の遺愛の生徒が着飾って教会まで列を成して歩く様子は感動的だった。」いかにも華やかです。この結婚式では、メソジスト伝道師が司式をし、例の「病めるときも…」の誓約をし、指輪もありました（『異教徒の女性の友』、1887年及び*Minutes of the Woman's Conference, 1887*）。

なお、ここに挙げた9人のうち、商人の娘は1名、旧家漢学者の娘は1名、不明は2名で、残りは維新負け組の士族出身です。この時代の男性クリスチャンの一般的出自に近似しています。

1895年に結婚した佐々城信子（海岸女学校で学ぶ）と潮田うた（潮田千勢子の娘。海岸女学校出身）は、クリスチャン・ネットワークまたは教会を舞台に知り合った男性と仲介者なしに交際し、結婚しました。前者は失敗し、後者は、添い遂げました。二人ともクリスチャンの親に育てられまし



(図10)

遺愛の新校舎（おじゅんさんの結婚の前に完成）
Heathen Woman's Friend vol.XIV (1882年10月号)

た。第二世代目になると、「男女交際」はかなり一般化したのかもしれませんが。1898年にアメリカで結婚した杉本鉞子は特殊なケースです。兄が決めた在米日本人と婚約し、結婚準備のために海岸女学校に入り、6年間在学し、卒業後の5年間、浅草の美以美小学校でお礼奉公をして、やっと渡米して結婚しました。会ったこともない人と結婚したのは、いかにも旧式です。相手の杉本松雄が洗礼を受けていたかどうかははっきりしませんが、彼と鉞子を取りまくアメリカ人はクリスチャンでした。



(図11)
小崎(岩村)千代

数は少ないのですが、これらのメソジストの女学校の同窓生たちの結婚後を調べてみますと、夫に寄り添うというより、夫は夫、妻は妻という傾向が強いように思います。小崎千代(図11)も元良よねも矯風会の活動で飛び回りました。元良よねの夫は東京英和学校で進化論を教えたことから宣教師と決裂し、結局帝大の教授になりました。それでも、よねはその後も同窓会の中心メンバーでした。元良は婿取りだったというのも大きいと思いますが、佐々城と松本はうまくいかなければ、子供がいても離婚しました。稲垣鉞子は結婚の経緯だけみると従順に見えるのですが、『武士の娘』や内田義雄による伝記を読むと、夫の影は薄いです。早く亡くなったせいもありますが、鉞子は自立していて、いかなる環境にも適応したようです。この自立性は、アメリカのメソジストの女性たちの特徴です。メソジストの婦人伝道局は、男性が仕切る海外伝道局の下部組織ではなく、別個の、対等な組織で、集めた資金を自分たちで所持し、使い道を決め、また、海外の財産を所有していました。日本では、1884年に日本年会ができたとき、婦人年会が、同じ日時に別個に開かれるようになりました。開会宣言は監督がやりましたが、後のセッションは女だけです。こういう女性の自立性は、生徒に乗り移ったのではないのでしょうか。

すでに述べたように、1890年代に向け、男女交際の当事者イニシアティブは増大してきました。『読売新聞』は1890年に11回にわたり、「女学生の醜聞」を連載し、その余波は1893年まで続きました。当時の「女学生」の多くはミッション・スクールの生徒でした。例えば、こんな記事があります。教会で仲良くなった男女がいて、男が病気になり、女は下宿に泊まって看病したと。周囲が注意したら、「私共バイブルを両人の床の間に於て寝ますればハイ天にまします造物主こそよく御存じでござります」と答えたそうです。この記事は悪意に満ちていますが、クリスチャンの間の男女交際の特徴をとらえていると思います。当時のクリスチャンは、純潔道德を守ることが絶対の前提になっていました。そのことが、非常に自由な交際を許すことになったように見えます。佐々城信子やその従姉妹の星良(相馬黒光)の行動歴を見るとそれがわかります。そしてそれを、純潔道德が一般化していない—プラトニックな愛と性愛を区別しない—日本社会の側から見ると、この醜聞記事になるのです。ミッション・スクールの女学生のセクシュアリティはこのように問

題化されるようになりました。

最後に1893年から94年に起こった日本の花嫁事件について私なりの解釈をお話したかったのですが、もう時間がありません。一言、この事件は、結婚とホームの問題が宣教師だけでなく、日本人クリスチャンにとっても重大関心事だったことを証しているということだけ指摘して、本日のお話を終えたいと思います。

写真（一部、講演のスライドに使用した写真と異なります）

図4,5,6,7,11：青山学院資料センター所蔵

図9,10： *Heathen Woman's Friend*（メソジスト監督派教会女性海外伝道協会機関誌『異教徒の女性の友』）より

参考文献の主なものは以下の通り。典拠の詳細はこれらを参照してください。

小檜山ルイ 『アメリカ婦人宣教師』（1992年）。

同上 「女性と政教分離」『歴史のなかの政教分離』（2006年）。

同上 「北米出自の女性宣教師による女子教育と「ホーム」の実現」『近代日本のキリスト教と女子教育』（2016年）。

同上 「近代日本におけるキリスト教と女性」『近代日本にとってのキリスト教の意義』（2019年）。

同上 『帝国の福音』（2019年）。

近代日本における女子高等教育への道

—メソジスト女性宣教師と日本人教師から探る—

大森 秀子

はじめに

1982年は青山学院大学において一つのエポックを作った年である。この年に厚木キャンパスが開学され、同時に国際政治経済学部が創設された。当時、英米文学科は高水準の英語教育の伝統をもち、当学科への入学生の大半は女子学生であった。「青山学院大学厚木開学ニュース」第1号で大木金次郎院長・理事長は、新設学部によって変わる本学のイメージと、変わらない建学の精神を次のように述べている。

この新設学部は、英語を専門とする男子学生を集めて、その上に国際政治、国際経済および国際経営に関する専門家を各々50名づつ養成しようという意図をもって作るわけであります。……従来の本学に対する世評はとかく女子大学のイメージがかなり強く働いていますし、元来、英米文学科以外の全学部の中にも相当数の女子学生が在学していますから、新設学部の大部分を主として男子学生に限定しても決して女子学生軽視にはなりません。……本学はキリスト教による人格の練成をするという建学の精神を堅持していることもまたよく理解した上での受験生が多く集まることを期待しています¹。

ここに示された青山学院大学の女子大イメージとキリスト教による人格教育という建学の精神については、青山学院の歴史を丁寧に見ていく必要がある。本学院の創立記念日は11月16日である。毎年、創立記念礼拝が守られ、学院に関わる人々にとってその日を忘れることはできない。しかし、一体いつ、どのような経緯でその日を創立記念日として定めることになったのだろうか。先の厚木開学ニュースでは、女子部の青山女学院が1927年4月に男子部の青山学院と合同し、「創立50年記念式の前後に第6代の阿部義宗院長の手により、それまでの男子部の創立記念日を女子部のものに変更した」と記されている²。つまり、現在の青山学院の創立記念日は女子部門が始まった1874年11月16日に由来し、キリスト教女子教育の伝統の上に成り立っている。

いわゆるミッション・スクールは女子教育のパイオニアとして、近代日本の教育界をリードし、女性の地位の向上と教育機会の普及に先駆的役割を果たした。本稿では、青山女学院のケースから、伝道の必要から開始された女子教育がメソジストの女性宣教師に

よってどのように目論まれ展開され、どのような女性が生み出されたのか、また、青山女学院の教育にかかわった女性宣教師と日本人教師が、女性の家庭・職業・経済的自立について、どのような意見を持っていたのか、さらに、キリスト教各派共同による宣教師主導のキリスト教連合女子大学運動が進展し、日本の女子高等普通教育の要望が高まる中で、東京の高等女学校のネットワークにおいていかに婦人問題研究が進められたのかについて論じる。

1. 19世紀アメリカにおけるメソジスト・ウーマンの働き

1.1 アメリカメソジスト監督教会の組織体制と女性の聖職観

アメリカのメソジスト派が英国国教会から独立したのは1784年である。その年のクリスマス年会において「メソジスト監督教会」が確立し、トマス・コークと共にフランシス・アズベリーが最初の監督に選ばれた。18世紀末の広大なアメリカの地理的空間への伝道に際し、メソジスト派はイギリスと同様、巡回制を採用し、中央集権的な組織体制を着実に樹立した。アメリカ全土はいくつかの地区に分割され、地区年会が数個の巡回区から成る地区全体を統括する。地区年会の上位には、4年ごとに開かれる総会が設定され、「総会・地区年会・四季会」が行政機能を持つものとして、「合同ソサイエティー (united societies)・ソサイエティー・クラス・バンド」という一連の集団を統合した。

男性中心の教会行政に対して、男性と同等の資格が女性サイドから要求されるようになるのは、19世紀中葉のことである。1869年にマーガレット・コット (Margaret V. Cott) がメソジスト監督教会で地方説教者の資格を得たことが契機となって、4年ごとの総会や地区年会で女性投票権に関する議論が活発化した。1888年に総会に正式派遣された4～5名の女性のうちの一人が、ロックリバー・カンファレンスから参加したフランシス・ウィラード (Frances E. Willard, 1839-1898) であった。総会における女性平信徒の投票権への反対は根強かったが、1906年によく承認された。

ウィラードは女性キリスト教禁酒同盟 (1874年結成) の会長を1879年から1898年まで務め、アメリカ社会における女性参政権の熱心な唱道者であったことがよく知られている。禁酒法成立に向かう運動において、ウィラードは家庭保護キャンペーンの一貫として女性の参政権を訴えた。女性キリスト教禁酒同盟のスローガンは「神と家庭と母国のために」であり、全世界が家庭のようになることが彼女の目標であった。ウィラードの聖職観は、バーバラ・ウェルターの「真の女らしさの信仰」のレトリックで説明される。彼女にとって聖職とマザーフッドは矛盾せず、牧師職は「母の仕事」として捉えられた³。

1.2 アメリカメソジスト監督教会の女性組織とディコネス運動

メソジスト監督教会の女性グループは、19世紀後半にメソジスト監督教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church;

WFMS)、並びにその相補団体として、女性国内伝道協会 (The Woman's Home Missionary Society of the Methodist Episcopal Church; WHMS) を組織している。1869年に創設されたWFMSはメソジスト監督教会の親協会からの経済的援助を受けない形で独立した活動を開始する。設立されて1年も経たないうちに、インドにイザベラ・ソバーン (Isabella Thoburn) とクララ・スウェイン (Clara Swain) の2名の独身女性宣教師が派遣された。1874年には同じく独身女性のドーラ・スクーンメーカー (Dora E. Schoonmaker, 1851-1934) が日本に派遣され、5年間献身した。

他方、1880年に結成されたホームベースのWHMSは、海外の異教世界だけでなく、国内の新規移民の置かれた状況に目を向け、東欧・南欧などからの移民の密集する地区で支援活動を行った。奉仕した女性はディコネス (deaconess) と呼ばれ、聖書の典拠はローマの信徒への手紙16章1-2節である。パウロはケンクレアイの教会の奉仕者として大きな役割を担ったフェベをディアコノス (diakonos) と呼び、「多くの人々の援助者」とみなした。ケンクレアイはコリントの東方にあるエーゲ海に面した港町で、不道德な地域であった。フェベが病人や痛みのある人々になした奉仕は、後のメソジスト女性によって19世紀後半アメリカの都市産業社会における奉仕の模範と捉えられた。メソジスト監督教会において正式にディコネスが法制化されたのは、1888年のことである。総会では、ディコネスの務めを次のように規定している。

ディコネスの務めは貧しい人に仕え、病人を見舞い、臨終の人と共に祈り、孤児の世話をし、さまよう人々を探し、悲しみにある人々を慰め、罪人を救い、さらに、一般的な方法で没頭する他のすべてのことを斥け、自らの賜物にふさわしくキリスト教のわざに献身することである。(略)⁴

1889年のディコネス・カンファレンスでは、入会とサポート・服装・入会許可などの規定が決議された。以下は服装に関する内容である。

服装

我々はすべてのメソジスト監督 (教会) のディコネスが独特な制服を着用することを推奨する。

制服の色は黒であること。

ガウンは装飾ひだで飾らず、ひだをとったスカートあるいはギャザー・スカート、丸みのある身ごろ、カフスのついた司教袖で作られること。

リンネル地の襟とそで口、もしくは無地で地味なルーシュを用いること。

髪はさっぱりとすること。

宝石は襟にピンとかブローチ以外身につけないこと。

外出用の上着は長い田舎風の外套であること。

白いひもを用いて規定の形の黒い帽子を身につけること。

看護婦のディコネスの作業着は青と白のストライプの薄織リンネルで、普通の看護婦の帽子とエプロンを身につけること。

夏用の服は黒のシャツ織で、規定のスタイルで作られること⁵。

ディコネスは独身で、ディコネスホームで共同生活をし、派手な装飾品は身につけず、一定の服装を着用して無償奉仕を行った。第一次世界大戦後になると、「フラッパー」の生活スタイルが広がり、ディコネスの新しいモデルが示されるようになる。つまり、共同生活の理想から離れてディコネスホームは閉鎖され、ディコネスは独身、既婚にかかわらず、女性の伝道奉仕者を意味する言葉として用いられることになる⁶。

第一世代のディコネス運動を牽引したのは、ルーシー・ライダー・マイヤー (Lucy Rider Meyer, 1849-1922) である。マイヤーはオバリン・カレッジ及びフィラデルフィアの女子医学校で教育を受けた後、ヴァーモント州のトロイ・カンファレンス・アカデミーの女性校長、イリノイ州のマッケンドレー・カレッジの化学の教授を歴任し、豊かな教育経験を有していた⁷。彼女は女性が伝道と奉仕に必要な技術やリーダーシップを訓練する必要があると判断し、1885年にシカゴ・トレーニング・スクールを開設した。この学校は、シカゴの都市伝道・家庭伝道だけでなく、海外伝道のための指導も行った⁸。

このシカゴ・トレーニング・スクールで訓練を受けた後、日本に派遣され、1887年から1892年に海岸女学校及び東京英和女学校で音楽の教鞭を執った女性宣教師が、メアリ・ヴァンス (Mary A. Vance, 1858-1892) である。ヴァンスはシカゴの音楽学校を卒業した後、8年間アイオワのバーリントンで教会オルガニストを務め、メソジストのシカゴ・トレーニング・スクールで2ヵ月訓練を受け、29歳の時、日本に到着した。その3年後、男子系の東京英和学校で心理学・論理学・演説法・弁証学を教えていたメソジスト宣教師のジョン・ベルナップ (John F. Belknap) と結婚した⁹。翌年、一女を得たが、子どもが1歳にならないうちに、34歳で天に召されている。宣教師夫妻のホームは日本人クリスチャンにとってはまさしくモデルとなるものであったが、日本で結婚した女性宣教師が経験する出産・育児の伴う海外伝道はいのちがけのものであったことを物語っている。

2. 19世紀後半のメソジスト監督教会女性海外伝道協会の日本伝道

2.1 バイブル・ウーマンの養成とクリスチャン・ホームの形成

日本における初期のキリスト教学校は日本伝道の必要から宣教師の教育活動として始まった。WFMSの場合、1874年11月16日にスクーンメーカーによって女子小学校が開かれた。翌年、救世学校に改称し、1877年に築地の校舎に移転して海岸女学校となった。当学校は東京ホームと呼ばれ、この場所が伝道と教育の拠点となり、寄宿舎学校だけでなく、日曜学校、バイブル・クラス、婦人集会などを通して伝道活動がなされた。スクーンメー

カー校長時代の海岸女学校の一つの目標は、家庭性に裏づけられた有能なクリスチャンの母・妻を創出することにあった。1879年のスクーンメーカー帰国後の様子は、第3回メソジスト監督教会婦人年会記録（以下、年会記録）¹⁰のアンナ・アトキンソン（Anna P. Atkinson）、レベッカ・ワトソン（Rebecca J. Watson）、マチルダ・スペンサー（Matilda A. Spencer）の報告からうかがえる。そこでは家政を担うよき家庭人の育成に加えて、能力あるクリスチャン・ワーカーの養成が目指されている。

日本人教職者及び補助者の養成に関し、当時、女性の牧師は存在しなかったことから、日本メソジスト監督教会婦人年会は女性の伝道者養成学校として1884年に聖經女学校（横浜女子伝道学校）を開校した。その学校は英語名でDeaconesses' Training School, Training School for Bible Womenと呼ばれ、ディコネスとバイブル・ウーマンは同義語として用いられている。元来、インド・中国といったアジア伝道におけるディコネスの使命は異教地の「残酷な慣習を打破し、重荷を取り除く方法を同性の婦人達に教えること」であり、トレーニング・スクールはそれに従事できる女性、また、デイ・スクールの教師を育てるところに主眼があった¹¹。

ヴァンスが来日した年の第4回年会記録（1887年）をみると、音楽伝道と教育を通しての彼女への期待をみてとることができる。第7日目の午後のセッションでヴァンスはシカゴ・トレーニング・スクールの方法に従って、教育的な聖書朗読を実施した。この時、「バイブル・ウーマンの務め」と題して、聖經女学校の直近の卒業生の稲垣夫人（Mrs. Inagaki）の講話もあった。また、バイブル・ウーマン委員会では、1. 我々の学校では禁酒、教会史、教会自治、神学上の主要な質問に関する実践的な指導を与える講義コースを確立すること、2. 音楽を重要な伝道手段として認識しながら、より体系的な音楽教育を与えること、3. 編み物や装飾作業が（クリスチャン）ワークへの有用な付属物として定期的に教えられること、4. 実用的である限り、適切な図書館が備えられ、女性が日本で入手可能な文学・宗教の定期刊行物を読むよう奨励されること、5. バイブル・ウーマンのための教育課程が毎年、議事録で公表されることを決議している¹²。

第5回年会（1888年）のバイブル・ウーマン委員会では、レギュラー・コースの卒業生はディコネスとして推薦され（決議2）、積極的なクリスチャン・ワークに従事したディコネスは1年の経験を経た後、婦人年会のメンバーとなること（決議6）が決議されている¹³。1890年には「日本メソジスト監督教会婦人年会規約」の第2条で、「その目的は、女性海外伝道協会の代表者、親伝道局の女性、日本人ディコネスが協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」¹⁴と規定された。

ヴァンス没後115年を経た2007年から2008年に遺族から青山学院にヴァンス書簡集の寄贈があり、そこには日本メソジスト監督教会婦人年会の追悼礼拝（1893年）におけるチャペル夫人（Mrs. M.F. Chappell）¹⁵の追悼文も収められている。以下の言葉から、生徒の心に刻まれたヴァンスの人柄が偲ばれる。

最愛の教師の特長について、セミナリーの若き女性は次のように述べています。それは、教室での公平さ、实际的な思いやり、生徒が前進することへの大いなる願望、聖書授業の準備の忠実さ、思い描く標準に至らない生徒に対する忍耐強さ、強いセルフ・コントロール、謙遜、寛大な精神、日曜学校のワークの熱心さ、人々のために労苦した熱烈な愛です¹⁶。

ところで、教育勅語の発布後、1890年から1894年にかけて、キリスト教女学校は「従来の伝道者養成を強調した教育目的から、より一般的な良妻賢母養成の目的に切り換え」たといわれている¹⁷。第8回年会（1891年）をみると、「日本メソジスト監督教会婦人年会規約」第2条は「日本人ディコネス」の語を削除し、「親伝道局の女性と女性海外伝道協会の女性が協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」¹⁸に変更されている。

その後、高等女学校令が私立学校令と文部省訓令第12号と同じ年の1899年に制定されると、天皇制国家体制下において良妻賢母主義教育が推進された。この時期にメソジストの伝道方針としてミッション・スクールによるクリスチャン・ホームの形成がより強く打ち出されている。それは、遺愛女学校長オーガスタ・ディッカーソン（Augusta Dickerson）の「伝道地における学校」（第16回年会記録）から読みとれる。女性宣教師にとってデイ・スクール、幼稚園は教育機関である以上に宗教機関（a religious agency）であったが、1880年代に開設された五つのデイ・スクールのうち3校が文部省訓令第12号発布後廃止され、1893年開園の幼稚園も同時に廃園されている。他方、東京では三田、四谷、青山に母の会が形成され、三田はファニー・ウィルソン（Fanny G. Wilson,）、青山はチャペル夫人（Mrs. B. Chappell）、四谷は両人が協力指導した¹⁹。

この反動の時代に、東京英和女学校及び青山女学院を経て1896年から名古屋清流女学校で校長を務めたエリザベス・ベンダー（Elizabeth R. Bender, 1858-1942；青山女学院長1902-3）は、「寄宿舍学校後、日本の少女のために何が（必要か）」（第16回年会記録）について語り、クリスチャン・ホームで営まれる崇高な生活と献身を求めた。アメリカでは実際にできないと断りつつも、「クリスチャンの少女たちが10人中9人でないとしても、大半のケースで未婚者と結婚するならば、我々の仕事は無に帰したということになる。なぜなら、私が見たところ、このような場合、クリスチャンの少女たちは結局、信仰を失ってしまうから。それで、ある程度、我々の少女の結婚を我々がコントロールすることが重要となる。」と述べている²⁰。

2.2 青山の最初の校友モデル ―小崎（岩村）千代―

アメリカの母言説には四つのタイプがあり、アメリカにおいてそれらは時代と共に順次進行している。19世紀初頭に、第一のタイプの生物学的な母に対して、母になることの意味や責任が問われ、家庭空間を超えて、第二のタイプとしての「共和国の母」が登場する。

すなわち、子どもを育てる養育者、また、子どもの有無にかかわらず、教師や道徳的指導者となることが求められた。次の1880年までには、第三のタイプの「改革主義者としての母」が生み出され、宗教団体や道徳改革団体を通して社会改善運動が推進された。その後、1880年から始まる40年間に女性は政治的な母として、禁酒法の成立や女性の参政権の確立に向かう運動を展開した²¹。この四つのタイプのうち、第二から第四のタイプへと突き抜けていく時代を生きたアメリカのメソジスト女性が、ウィラードである。

他方、日本に来日した女性宣教師は1880年代1890年代を通じて、およそ第二及び第三タイプの母を日本人クリスチャン女性の理想として示した。スクーンメーカーの日本伝道から半世紀を経た1924年の『日本メソジスト監督教会婦人年会概要』に、「青山の最初の生徒のライフ・ストーリー」と題する記事がある。「卒業式で青山女学院の卒業生の熱意あふれる面白い顔ぶれをのぞきこむ時、『現在在籍する1000名の学生と、こうした卒業生の中からどれくらいの人明日の改革運動のリーダーになるのだろうか?』という思いが生じてきました。その時、我々の勇気を強めるために、本校の始まりに遡ると、卒業生の多くの素晴らしい人生が我々の心によみがえってきました。50年を振り返り、後に禁酒運動と他の重要な運動で際立つリーダーとなった一人の少女について、語ってみましょう。」²²という言葉で始まる記事は、スクーンメーカーの最初の生徒7名の内の一人の岩村千代(1863-1939)を取り上げている。

1863年に生まれた千代は、12歳の時、スクーンメーカーから福音と異文化ともいえるアメリカのホームについて教えられ、ジュリアス・ソーパーから洗礼を受け、キリスト者となった。その後、小崎弘道(1856-1938)と結婚し、クリスチャン・ホームを形成し、福音伝道者としての役割を担った。千代のケースは初期のキリスト教女子教育を受けた代表的な校友モデルである。

千代の夫の小崎は熊本バンド出身で、1879年に同志社英学校を卒業した第1回生である。卒業後、東京で霊南坂教会の基礎を築き、その後、京都で1890年から1897年まで同志社社長を務めた。新島襄のキリスト教主義教育について、同志社を伝道者養成のための学校とみなす宣教師と、教育のための機関であるとする日本人教師が対立し、小崎はアメリカンボードとの関係を円満に解決できず苦しんだ。同志社辞任後、小崎が招聘された東京の京橋教会は1899年に霊南坂教会と合併し、彼は留岡幸助の後任として霊南坂教会で牧会し、長男道雄が副牧師を務めた。長女の安子は岩村の姓を継承し、日本基督教保育連盟(1931年成立)の初代会長・理事長としてキリスト教保育界をリードした。

霊南坂教会時代の千代は1903年当時、婦人矯風会(1886年設立)の文書課長として『婦人新報』を主幹している。1900年前後からメソジスト女性宣教師によって主導された青山母の会や三田母の会は日本母の会同盟へと発展し、千代は本同盟の事業を支えた。その後、青山女学院同窓会の会長を引き受け、1921年に矢島楯子の後、矯風会会頭に就任した。加えて、海軍軍縮会議に向けて、平和を求める日本女性の1万人の署名を携えてワシントンに赴き、ホワイトハウスでハーディング大統領にその署名を手渡した。

いわゆる1920年代は西洋文明の優位性に対する反省に立って、宣教師が日本人と対等な関係で友情を結び、民主主義に裏づけられた社会へと向かった時代である²³。クロティルダ・マクダウェル（Clotilda L. McDowell）はWFMSの機関誌である『ウーマンズ・ミッシヨナリー・フレンド』で、世界平和と世界親善、よき法の制定と施行、世界の青少年の保護と安全、世界正義の確立のために、「世界キリスト教女性連合」のネットワークの推進を決議したことを報告する際、千代の功績について、次のように称えた。

長い間、神の恵みに満たされてきた一人の小さな日本女性が、我国の大統領の前につつましく立ち、1万名以上の署名の入った巻物を大統領に差し出して、次のように述べたのは、数か月前のことです。「大統領殿、私は日本女性が平和を望むことを、軍縮会議のために集まる男性とあなたに伝えようと、我国からこれを持ってまいりました。日本女性は女性に広くドアを開いて、世界を人類に対する心安まる場にしてほしいと願っています。」²⁴

千代の生き方は「共和国の母」に裏づけられた女性像を超え、婦人矯風会の活動や平和運動にみるように、「改革主義者としての母」の側面も有している。

3. キリスト教女子高等教育の確立と拡大要望

3.1 キリスト教連合女子大学運動

20世紀に入って伝道と教育の関係は大きく変化する。1903年に公布された専門学校令によって、翌年、女子専門学校として認可を受けた学校は日本女子大学校・女子（津田）英学塾・青山女学院英文専門科である。宗教面においては、1905年に日本YWCAが発足し、その2年後に英文専門科学生を中心に青山学生YWCAが結成され、活発な宗教活動が展開された²⁵。この時代の青山女学院の教育に尽力した日本人教師として、舟橋雄を挙げることができる。舟橋は1873年生まれで、青山学院高等普通部を修了した後、アメリカのメソジスト系大学であるシラキュース大学、ボストン大学で英語・英文学を専攻した。帰国後、青山学院に奉職し、品性ある家庭的な女性にとどまらないより自由な生き方へ向かう女子教育を志向し、英文専門科出身者の教職という職業領域への進出を促した。1907年から1914年まで青山女学院の高等普通科教頭として活躍したが、1920年の英文専門科の廃止と共に教職を退き、学院の理事に就任している²⁶。

さて、日本におけるキリスト教大学構想は開教五十年記念会（1909年）、並びにエディンバラ世界宣教会議（1910年）で超教派の総合大学の設置が提案されたことが契機となっている。開教五十年記念会は文部省訓令第12号発令の10年後の開催であり、10月5日から10日までの6日間、テーマ別に分かれて第1講演会から第10講演会が行われた。女性をめぐる伝道と教育の問題は10月7日の第4講演会において議論され、『開教五十年記念講演

集『付祝典記録』には以下の13の講演が採録されている。

イー、タルカット嬢	婦人伝道学校
シー、ダブリユ、バンベテン夫人（横浜聖經女学校長）	婦人伝道者に就て
本多貞子	教会に於ける婦人会
アイ、エム、ハーグレーブ嬢	婦人伝道者の地位と其事業
チロツテ、ピ、デフオレスト嬢	女学校生徒の日曜学校事業
稲垣スエ子（横浜聖經女学校教師）	未信者に対する伝道事業
ジー、ビー、ピアソン夫人	未信者に対する伝道事業
エヌ、ビー、ゲーンズ嬢（広島英和女学校長）	ミッション女学校
スーサン、エー、ソール嬢（神戸女学院）	ミッション女学校
アミイ、ジー、ルイス嬢（青山女学院長）	ミッション女学校に就て
和久山キソ子	開教五十年以来宗教事業としての幼稚園及び小学校の略史
グラデイス、フィリップス嬢	普通女学校の学生間に於ける伝道事業
ジョージアナ、ボークス嬢（常盤主筆）	基督教文学 ²⁷

この講演会で、青山女学院長のエイミー・ルイス（Amy G. Lewis, 1874-1934）は20数年の間に、キリスト教女学校の教育によって日本の女性に生まれた変化について、日本女性の中に純潔で愛情の上に築かれる家庭観を醸成したこと、結婚しないで教育事業や博愛事業に献身する女性のライフ・コースが求められるようになったこと、男女交際のルールが浸透したことを評価し、さらに女性の能力を発達させるために女子高等教育が必要であることを力説した²⁸。

翌年、エディンバラ世界宣教会議では、具体的に「女子高等教育については目下、できれば二つのキリスト教女学校を必要とする。その一つは当然東京に置かれるべきである。他のキリスト教女学校は現段階ではこの2校の行う高等教育（the higher grade）の事業に着手すべきではない。」と決議し、その後すぐに、ジョン・モット（John R. Mott）を委員長とする継続委員会が設置された。1911年にはその可能性を調査するための特別委員会が組織され、調査報告書は「一つの連合大学は数多くの小さな学校がかかる費用よりも平均して少ない費用で、極めてよりよい方法で備えることができる。」という見解を示し、「共通の信仰の本質的一致」の前進を強調した²⁹。それを受けて、1912年12月にアメリカにおいて正式に促進委員会が再編され、日本で女学校を経営している10のプロテスタント各派教団から外国人、日本人1名ずつ、代表者が選出された。青山女学院からは、1914年5月に校長に就任したアルバータ・スプロールズ（Alberta B. Sprowles, 1872-1859）が委員として出席した。最終的に6ミッションが支援し、その傘下にある女学校が協力して、1918年4月に新渡戸稲造を学長、安井てつ（1870-1945）を学監とする東京女子大学が開校した。

キリスト教各教派の内側の動きに関する限り、各キリスト教女学校が高等科・専門科を

廃止して、卒業生を新しいキリスト教女子高等教育機関に送るという犠牲の伴うものであったため、後ろ盾を必要とした。日本全国のキリスト教女学校はネットワークを結び、日本基督教女子教育会（1913年10月4日成立、その母体は京浜基督教女子教育会）を組織した。スプロールズは日本基督教女子教育会第4回大会の副会長を引き受けた。本教育会はキリスト教連合女子大学運動の成功にとどまらず、青年の男女交際問題を取り扱い、男女交際法の標準となるものを調査し、日英両文で小冊子を作成することや男子の基督教々育同盟会と共同委員会を組織することなどを話し合っている。その後、日本基督教女子教育会は東京女子大学が成立した後、男子系の基督教々育同盟会（1910年4月6日組織、現在のキリスト教学校教育同盟の前身）と1922年に合併した。日本基督教女子教育会の最後の第10回大会で副会長の任にあたったのは、1914年4月に青山女学院高等女学部（高等普通科改称）教頭に就任した塚本はま（1866-1941）であった³⁰。塚本は1911年以来、青山女学院の家事・国語・修身を担当し、1923年まで奉職した。1920年に英文専門科を失った青山女学院は、翌年、高等女学部専攻科として2年課程の家政科を置いたが、スプロールズを助け、この運動を支援した塚本の役割は大きかった。

創設時の東京女子大学は予科1年、本科3年の英文科、人文科、国語漢文科、実務科を置き、さらに、専修科2年が設置されている。開校時に安井が「新設東京女子大学に就いて」という題目で、YWCAに発表した記事を見ると、東京女子大学が新しい試みとして設置した人文科について、「この科は頭脳のある常識の発達した人格の高い淑女を養成するのが目的で、職業的教育を授けて将来独立の生活をしようとする目的よりも、寧ろ一家の主婦となるのに充分の素養を作り度いと希望する人に適します。」と述べる一方、実務科では「第一部は商業の知識を持つ人を養成します。」「第二部は工場の監督者或は慈善事業に関する重なる働き人を養成します。」と説明している³¹。

本科の入学者内訳は、人文科8名、国語漢文科11名、英文科42名、実務科7名となっている³²。女性にキリスト教に基づく高等普通教育の機会を提供することを基本に、東京女子大学はいわゆるリベラル・アーツ系カレッジとして展開した。女子大が開校された年の『ウーマンズ・ミッショナリー・フレンド』には、「東洋の女性の解放」という記事が掲載され、新しい女子大学におけるキリスト教人格教育の意義が強調されている。次のように記されている。

新しい連合女子カレッジの学長である新渡戸稲造は、日本における婦人運動とキリスト教を次のように説明する。「これまで東洋では、人格がほとんど重要視されてきませんでした。私たちは集団という人間関係でものを考えます。ほとんどの人がおそらく人格といったようなものがあることを認めるでしょう。しかし、それは完全に男性のものであると主張することでしょう。女性は自分たちには何もないと言うでしょう。経済上の女性の地位は全く剥奪されており、決して独立していません。女性は単に家庭内のメンバーでしかありません。すなわち、娘・妻・母・未亡人です。キリス

ト教はまさにこの考えを断ち切り、個人の責任と自由に重きを置きます。故に、キリスト教は女性の新たな価値を私たちに与えています。」³³

3.2 女子高等普通教育の拡大要望

1910年代後半は高等女学校が量的に拡大し、高等女学校程度以上の教育について、それに即した職業教育の在り方が問われるようになった。1917年開催の第1回全国高等女学校校長協議会において、東京の女子教育関係者が中心となって、「女子高等普通教育の向上、専門教育の拡充、帝国大学の門戸開放、官立女子大学の設置など、男性と対等な高等教育の問題が論議され」ている。こうした女性の高等普通教育への拡大要望に対して、同年、岡田良平文相は「高等女学校程度で満足してよいと思つてゐる」、「経済上女子に独立の職業をとらせなければならぬ様になるか何うかそれは分からないが此事は……理想とすべきでないものに対し準備をすることは要らぬ」と発言した³⁴。これに対して、一人の女性が『婦人の自覚』と題して、YWCAの機関誌に投稿している。

私は女子も男子と同様に高等教育を授けて然るべきものと思ひます、……私は男子と同様女子も人間である事を主張する、家庭に於ける責任は、男子の社会に於ける責任と同様、寧ろそれ以上に重大なものである事を高唱する、何となれば第二の国民は家庭より出づるのであつて、大学者大宗教家も皆母より生れるのである、無教育な愚かな母に賢なる子供を望むのは間違である。

私は決して独身論者ではない、寧ろ男女は結婚に依つて一体となるべき者である事を主張する者であるが、女子も男子と同様高等普通教育以上に職業教育を必要と思ふ、……

もう少し世間の人々が女子といふ者を了解し、無暗に屈伏せしめず、男子と同様に教育の自由を与へ、人としての向上発展を計らしめたならば、社会の改良は云はずして行はれ、国家社会の爲め、広くは世界人類の爲め非常に幸福な事と思ひます³⁵。

ここでは、女性の領域である家庭における役割と責任を自覚しつつも、社会改良、国家・世界人類の発展をも視野に、男子と同等の高等普通教育機会の確立と、新しい青年女性のための（専門的な）職業教育の必要性が主張されている。

3.3 高等女学校同窓連合会における婦人問題研究

超教派の東京女子大学の設立方針が決定し、青山女学院が1920年に英文専門科を完全に廃止するまでの間³⁶、キリスト教学校を超えて、高等女学校程度以上の学校が結集した同窓連合会の研究活動について触れたい。第1表は、1918年に始まる青山女学院校友会の参加への呼びかけから、高等女学校同窓連合会の成立を経て1919年までに展開された内容を筆者がまとめたものである

表1 高等女学校同窓連合会（1918-1919年）

日 時	集 会	場 所	座長・議長・委員長	内 容	青山女学院校友会	備 考
1918（大正7）年秋	呼びかけ		発起人：安井てつ（東京高等女子師範）、羽仁もと子（府立第一）、塚本はま（東京高等女子師範）、井上秀子（日本女子大）	東京市内の高等女学校程度以上の女学校同窓会の連合会組織の提案	校友会役員会にて加入を協議、代表者会に舟橋雄、小崎千代（校友会会長）、大平つぎ子（校友会副会長）、松岡久子を選出	湯原元一（東京女子高等師範）及び成瀬仁蔵（日本女子大）の賛同
1918（大正7）年10月10日	発起人及同窓会代表者の会	東京女子高等師範学校桜蔭会館	議長：（前半）安井、（後半）宮田修（成女高等女学校）	開会の辞：井上 連合会組織の理由及び必要（井上、塚本、羽仁）と演説（佐方鎮子〔神田高女〕、三谷民子〔女子学院〕、三輪田元道〔三輪田〕、市川源三〔府立第一〕他） 規約起草委員の選出：市川、武藤忠義（府立第二）、塚本、井上、安井、羽仁、三谷、小崎、佐方、井出（実践）、馬上孝太郎（学習院）、蟹江（女子英学塾）	小崎、肥田すぎ子、松岡、舟橋出席	37校70名以上出席
1918（大正7）年10月20日（もしくは28日）	規約起草委員会	日本女子大学家政館		目的：1. 同窓会相互の気脈を通じて、懇親を温むること、2. 一致協力して家庭生活の改善を図り、婦人に関する諸問題を考究すること 構成：同窓会から代表者2名。委員の任期は1年、半数改選。同窓会又はその母校たる女学校より相談役1名	松岡、舟橋（小崎の代理）出席 当規約により、舟橋は相談役となる	15名出席（起草委員の他、成瀬、山脇房子〔山脇〕、穂積〔女子大〕、河野〔女子大〕）
1918（大正7）年11月9日	第1回代表者会	三輪田高等女学校	議長：宮田	規約承認 会費は一時創立費として各校十円を出すことを決議	松岡、舟橋出席 加入誓約については、校友会役員会での決定後とした。（11月20日に正式に加入決定、代表者は役員会での決議なしに賛否を決める自由をもつことも決定）	25校約40名 新設の東京女子大学は同窓会がないため、安井は個人として参加
1918（大正7）年12月7日	第2回代表者会	双葉高等女学校	議長：塚本	組織の具体案として、四つの委員会を設置し、委員を選出（下線部は委員長） 食物改良部：井上、他に2～3名 衣服改良部：松岡、石川しづ子、羽仁、近藤すみ子、津下じつ子 思想研究部：三谷、舟橋、安井、黒崎えつ子 社交改良部：羽仁、福島、小崎、松岡	舟橋、松岡、平島君子（小崎の代理）出席	
1919（大正8）年1月16日	思想研究部委員会	女子学院	委員長：三谷	読書会、講演会、新刊書の紹介、家庭での研究会等を提案	舟橋出席	委員5名参加（三谷、舟橋、安井、黒崎、長谷川喜多子）
1919（大正8）年1月20日	食物改良部及び衣服改良部の委員会	日本女子大学家政館		食物改良部では、井上の指導の下、調理された米食節約料理の試食。衣服改良部では、1. 子どもへの経済的服装（赤坊によい着物をきせないこと）、2. 衣服の数を少なくする方針（下着の改良等）、3. 普通外出着を銘仙程度にし度いこと、4. 礼服の改良は今回の議題とすることを決める。	松岡出席	11名参加（安井、三谷、羽仁、長谷川、井上、近藤、柳八重子、金土、佐堂、黒崎、松岡）
1919（大正8）年2月1日	第3回代表者会	女子学院	座長：塚本	常務委員10名の選定 羽仁、安井、塚本、井上、福島、松田、神（府立第二）、岡本（女子英学塾）、水野（学習院）、寺尾（府立第三）	肥田、貴田、舟橋出席	宮田から新聞・雑誌を通して会の成立や主題を発表し、各校に通知する提案が出される。今後、事務所を雑司ヶ谷上り屋敷の羽仁方とし、事務担当者を選定。
1919（大正8）年2月8日	第4回代表者会	女子学院		相談役の中から常務委員を定める案は撤回。 思想部案の世話人として、青山から山内仁子と久万嘉寿恵を指名。 各委員会の報告 衣服部：羽仁報告、1. 児童の洋服から日本婦人の服装を漸次改めること、2. 形式に拘泥した服の着方を廃すること、3. 社交的集会以外は常に質素を主とすること、4. 児童に重衣着物を着せず、七五三の祝着の類を廃止すること等の意見。 思想部：1. 最寄りの学校又は家庭で研究会を催すこと、2. 講演会を催すこと、		

				3. 各校科外講演等の会員聴講料の減額、4. 適当な書物を選ぶこと、5. 各校の図書館の会員使用を許可すること、6. 良書を読み、委員へ紹介すること。たとえば、文部省より通俗図書調査表の配付を受ける等の意見。 食物部：柳（井上の代理）報告1. 米食代用品（麦及雑穀のパン）を紹介すること、2. 各校で料理した弁当を生徒に供給することは不可能か？日本女子大で代食講習会を開催し、実費を会で負担する等の意見。		
1919（大正8）年 3月29日	代表者会	東京女子高等師範学校校務会館	座長：塚本	新卒業生歓迎会の打ち合わせ、講演会・裁縫講習会の計画報告	貴田、肥田、舟橋出席	
1919（大正8）年 4月3日	新卒業生歓迎会	東京女子高等師範学校大講堂	司会：羽仁	新卒業生歓迎会 演説：市川・佐方・井上・塚本（洋服裁縫講習会の報告を含む）・安井・小橋三四子・三輪田之道・宮田・三谷（講演会報告を兼ねて）・倉橋惣三（講演予告を兼ねて） 岩田さと子鈴信子らの独唱又はピアノ		500～600名の会歌の合唱。 演説会の広告：倉橋惣三「児童の心理」（4月16日から4回）、吉野作造「開戦より講和まで」（4月22日から3回）、穂積重遠「婚姻と離婚」（5月10日から4回）、有島武郎「内部生活の現象」（5月21日から4回）、矢作栄蔵「物価の話」（6月5日から4回）
1919（大正8）年 4月24日	思想部委員会	女子学院		委員が加入同窓会の母校を分担訪問し、講演・読書・研究その他の会合開催を勧誘し、出席の便宜を図る		
1919（大正8）年 4月26日	読書会	青山女学院		舟橋雄講演会（英国現代作者ゴールズワージーの問題劇）、第1回読書会	貴田を含む3名が思想部世話役となる	
1919（大正8）年 6月21日	読書会	青山女学院 パーラー		舟橋雄講演会（建築と装飾に於けるルネサンスの精神）、土生英子講演会（ブラックウェルス著「ロシア革命のおばあさん」の解題）、第2回読書会		会費10銭

（青山女学院校友会『会報』第22号 [1919年7月]、102-127頁より、筆者作成。）

高等女学校同窓連合会成立の背景について、青山女学院の舟橋は、「戦争の為に起つた種々の現象の内に、生活の圧迫といひ、思潮の変動といひ、世界中に瀰漫した社会改造の叫びといひ、孰れも我々をして惰眠を貪らしめず、特に教育ある女子の研究を要する問題や、実行しなければならぬ方法が種々と増えて参りました。かゝる機運を察して、東京市内の各高等女学校や、夫れ以上の学校の卒業生を糾合して、何等か彼等の及ぶ範囲に於いて現代社会に貢献するあらんとして起つたのが、昨年の秋から屢々話しのあつた高等女学校同窓連合会なるもののなのです。」³⁷と説明している。

高等女学校同窓連合会は1918年10月に安井てつ（東京女子高等師範卒）、羽仁もと子（府立第一卒）、塚本はま（東京女子高等師範卒）、井上秀子（日本女子大卒）が発起人となり、東京市内の高等女学校程度以上の女学校同窓会の連合組織を提案した。青山女学院からは代表として、校友会会長の小崎千代、副会長の大平つぎ子（代表者会には代理として肥田すぎ子が出席）、松岡久子（1902年高等科全科卒）³⁸及び教師の舟橋が選出された。翌月、青山女学院校友会は正式に加入決定した。

本会の目的は、第一に、「同窓会相互の気脈を通じ、懇親を温むること」、第二に、「一

致協力して家庭生活の改善を図り、婦人に関する諸問題を考究すること」に置かれた。松岡は当時、米騒動など不安的な社会情勢の中で行われた本連合会を、教育を受けた女性の協力による生活運動と位置づけている³⁹。本会に東京女子高等師範学校長の湯原元一や日本女子大学校長の成瀬仁蔵が賛同を示し、東京府立第一高等女学校長の市川源三などが参加していたことは、日本の女子高等教育の制度化への要望を反映するものであったともいえる。

事業内容は、食物改良部、衣服改良部、思想研究部、社交改良部の4種類に分割され、食物改良部は家政学科を設置した日本女子大学校の家政館を会場に研究報告がなされている。衣服改良部は羽仁や松岡の活動が目にとまるが、子どもの経済的服装や女性の合理的な着物・洋服の推進の背景には塚本の生活改善思想の影響がうかがえる。思想研究部では青山女学院で舟橋を中心に英文学に関する講演会や読書会を開催している。そこで取り上げられた作品の一つは1909年から1915年までに書かれた、ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy) の問題劇 (Problem Plays) である。イプセンの影響を受けて、英国文学の現代劇に登場する人物は英雄ではなく、普通の人を特長とし、テーマとして独立する婦人の自覚、資本家と労働者の争闘、慈善の失敗などが扱われ、女性の自我や社会を見る目を養うものであった⁴⁰。その他、倉橋惣三、吉野作造、有島武郎などを講師とする連続講演会も企画され、各分野の思想潮流に触れる機会が提供された⁴¹。

おわりに ―安井てつと塚本はまの比較から―

メソジスト女性宣教師の日本伝道方針においてバイブル・ウーマンの養成からクリスチャン・ホーム形成へとシフトする1880年代90年代を経て、20世紀転換期のキリスト教連合女子大学運動による東京女子大学の成立、青山女学院英文専門科の廃止に至るまでの時代を中心に考察してきた。

千住克己によれば、近代日本の女子教育には三つの型がある。第一に教養中心の人間教育に主眼をおくもの、第二に家政的実科技芸を中心とするもの、第三に家政的実科の技芸を、豊かな教養を裏づけとする科学的・合理的知性をもって処理していこうとする三つである⁴²。

東京女子大学学監となった安井の場合、第一の型に属し、リベラル・アーツに重きを置く、キリスト教に基づく人格教育を行なった。東京女子大学の教養主義は理念的にジェンダーに縛られず、精神を自由にし、主体的な人格を形成する教育を基本とする。ここには安井の職業教育に対する警戒や学問観が反映している。それは、東京女子大学で栄養科設置案が浮上した時、安井の反対により不発に終わったエピソードに例証される。

天達文子の「栄養科主任事件」によれば、天達は東京女子大学卒業後、マウントホリヨークで生物学を学び、その後、成城女学校に勤務していた1934年に、東京女子大学で常務理事を務めたオーガスト・ライシャワー (August K. Reishchauer) から食事の誘いを受け

た。訪問先にYWCAの外国人総幹事のエマ・カフマン (Emma R. Kaufman) と安井も招待されており、天達はライシャワーから東京女子大学の栄養科設置の計画を聞き、栄養科主任の話を持ちかけられた。それに際しては、カナダのトロント大学で栄養学、食品科学を学んではどうかというものであった。当時、YWCAには栄養科のようなものがあったが、その基礎が欠けていた。東京女子大学の栄養科設置案に対して、安井はその目的が経営上財政的なことからきていることに納得がいかなかったようである。その後、天達は栄養学校などを調べ、栄養研究所の佐伯矩宛紹介状を安井から受け取った。佐伯との面談の結果、32歳の天達が栄養学を究めるには10年を要することなどを知り、その報告を安井にしたところ、「一天くまなく晴れた感じで先生実に朗らかであつたし、私もえらくさっぱりした。」と天達は述べている。その後、東京女子大学の高等学部の学科編成で、栄養学食品科学等が組み込まれ、佐伯の高弟が担当した⁴³。いわゆる1930年代当時、栄養研究は世界の食料問題と共に、科学的な研究を必要とし、女性の専門的職業を支えるだけの学問的基礎が未だ脆弱であった。

他方、東京女子高等師範学校を1890年に卒業した安井と同期の塚本は、第三のタイプの推進者である。家庭観、女性観、職業観に関する限り、塚本にとって家庭は女性の領域であったが、夫に依存することは退けられる。塚本は「経済上独立せる婦人」と題する講演で、女性の家庭性は経済的独立と両立するものであり、教育を受けた女性の精神的経済的自立を主張した⁴⁴。塚本にとって職業領域は男女対等に開かれるはずのもので、お互いがパートナーとなって社会を形成するという見地から、「婦人職業の発達に男子の職業を奪ふためではない。相提携して、国家に尽したいといふ誠意に発するのである。」⁴⁵と述べている。職業婦人の活躍を期待する塚本は、婦人の職業と家庭生活との両立を支持し、その基本を「簡易生活」に置いた。塚本はそれを「無駄のない生活」「能率のあがる生活」、「家庭の改善、弊習の廃止、虚栄、煩雑とをのぞいた意義のある、生きた生活」と説明し、家族の着物をはじめとする衣服の改良、食物の研究による食事の改善などを促した⁴⁶。

最後に、女性の職業と自立について、20世紀初頭の学問発達とWFMSの国際連帯へと向かう運動の中で、メソジスト女性宣教師がどのような専門的職業教育観を持っていたのかを検討することは、青山学院の女子高等教育史研究の課題である。

註

- 1 『青山学院大学厚木開学ニュース』第1号 (1981年3月)、5頁。
- 2 同上、3-4頁。
- 3 拙稿「アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育—青山女学院の場合—」『教育研究』第65号 (2021年3月)、101-102頁。
- 4 Russell E. Richey, Kenneth E. Rowe, and Jean Miller Schmidt eds., *The Methodist Experience in America: A Sourcebook*, Vol.II (Nashville: Abingdon Press, 2000), p.432.
- 5 *Ibid.*, p. 433.

- 6 前掲拙稿、103頁。
- 7 Mary Agnes Dougherty, *My Calling to Fulfill: Deaconesses in the United Methodist Tradition* (New York: General Board of Global Ministries, The United Methodist Church, 1997), p.39.
- 8 前掲拙稿、103頁。
- 9 ジャン・W・クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』（教文館、1996年）、17頁、275頁。
- 10 本節では*Minutes of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan, 1886-1901*（青山学院資料センター所蔵）を使用した。
- 11 前掲拙稿、99頁、104頁。
- 12 *Minutes of The Fourth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Yokohama: Japan Publishing Agency of The Methodist Episcopal Church, 1887), pp.12-13.
- 13 *Minutes of The Fifth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1888), p.15.
- 14 *Minutes of The Seventh Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1890), p.1.
- 15 正確にはMrs. M. B. Chappellと思われる。1890年にメソジスト宣教師のベンジャミン・チャペル（Benjamin Chapell）と結婚したメアリー・ホルブルック（Mary Holbrook）は、結婚後、年会記録でMrs. Chappellと記載されている。
- 16 *Dollie Vance and her Letters from Nineteenth Century Japan*, edited by Richard Jacobi (2007), p.53.（青山学院資料センター所蔵）本書簡集はご令孫のDr. Jacobiによって小冊子にまとめられたものである。表題紙には本国で親しまれた愛称Dollieの名が用いられ、少女時代の写真が掲載されている。内容はトピックに従ってタイトルを付して時系列に編集されている。全体で37通が収められており、巻末にはアメリカのヴァンス・ファミリーとその周辺に関する記載がある。
- 17 碓井知鶴子『女子教育の近代と現代―一日米の比較教育学的試論―』（近代文藝社、1994年）、39-40頁。
- 18 *Minutes of The Eighth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Hakubunsha, 1891), p.1.
- 19 前掲拙稿、105頁。
- 20 *Sixteenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church* (1898-1899), pp.83-84.
- 21 Donald G. Mathews, "Women's History/ Everyone's History," in Hilah F. Thomas and Rosemary Skinner Keller eds., *Women in New Worlds* (Nashville: Abingdon, 1981), p.44.
- 22 *Survey of The Japan Woman's Conferences, The Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church* (1924), p.54.（青山学院資料センター所蔵）

- 23 デーナ・ロバートによれば、第一次世界大戦後の女性宣教師の宣教活動は、ジェンダーによって分けられた世界を前提とする「女性のための女性の仕事」から、男性と共にエキュメニカルなイニシアティブをとる「世界親善」へとシフトした。(Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* [Macon: Mercer University Press, 1997], p.273.) 世界親善はエヴェリン・ニコルソン (Everyn R. Nicholson) がWFMS会長時代 (1922-40) の1923年に打ち出したメソジスト女性の海外伝道スローガンである。(千葉浩美「両大戦間期アメリカの平和運動における女性宣教運動の役割」『法政研究』第78巻第3号 [2011年12月]、89頁。)
- 24 Clotilda L. McDowell, "A World Federation of Christian Women," *Woman's Missionary Friend*, Vol.56, No.5 (May, 1924), p.170. <https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015030140126>(accessed 02-12-2022).
- 25 その後の青山女学院とYWCAとのかかわりをみると、1917年に変化が生じている。YWCA報告において、「一、四五年前からの傾向とか伺ひましたが、宗教的反動とでも申ませうか、宗教学校に有得べからざる一種の空気が校内にありまして、その中にあつて青年会はその目的のためにつくす事は試に困難に感ずるもので御座います、又委員が社会的常識を欠いて居りますため、思ひがけない心配事を引き起す事もございます。二、まず失敗の事から申す、一に対して答へましたやうな次第で昨年集会者少くまた脱会者も数ありました事は一つの大きな失敗で御座います。」と記されている。(『女子青年会』第4巻第8号 [1917年9月]、63頁。) さらに、学内では、「英文専門科の最後の生徒が卒業して女子青年会の一部の部門を失ってから、目立った活動は見られなくなった」ことが記録されている。(青山さゆり会編『青山女学院史』[青山さゆり会、1973年]、239頁。)
- 26 同上、223-224頁。
- 27 鶴飼猛編『開教五十年記念講演集 付祝典記録』(宣教開始五十年記念会事務所、1910年)、鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集 第三期 キリスト教受容史篇18』(日本図書センター、2003年)、196-271頁。
- 28 前掲拙稿、107-108頁。
- 29 拙稿「基督教女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』創刊号 (キリスト教学校教育同盟、2003年6月)、18頁。
- 30 同上、4-15頁。
- 31 『女子青年界』第15巻第1号 (1918年1月)、35頁。
- 32 『女子青年界』第15巻第6号 (1918年6月)、17頁。
- 33 "The Emancipation of the Women of the East", *Woman's Missionary Friend*, Vol.50, No.11(November, 1918), p.381. <https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015021233948>(accessed 02-12-2022).
- 34 湯川次義『近代日本の女性と大学教育—教育機会開放をめぐる歴史—』(不二出版、2003年)、

- 112頁、136-138頁。
- 35 『女子青年会』第14巻第6号（1917年6月）、16-17頁。
- 36 拙稿「基督教女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」、24-27頁参照。
- 37 青山女学院校友会『会報』第22号（1919年7月）、102頁。（青山学院資料センター所蔵）
- 38 青山さゆり会編、前掲書、221頁。
- 39 青山なを編『安井てつ先生追想録』（安井てつ先生記念出版刊行会、1966年）、22頁。
- 40 青山女学院校友会『会報』第22号、113-120頁。
- 41 本連合会は4～5年活動が続けたが、加入女学校において会費の過重負担となることなどから解散した。（青山さゆり会編、前掲書、587頁。）
- 42 平塚益徳編著『人物を中心とした女子教育史』（帝国地方行政学会、1965年）、131頁。
- 43 青山なを編、前掲書、73-79頁。
- 44 拙稿「アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育―青山女学院の場合―」、110頁。
- 45 塚本ハマ子『現代婦人の生活』（同文館、1935年）、16頁。（国立国会図書館デジタルコレクション）<https://www.dl.ndl.go.jp/api/iiif/14442665/manifest.json>(accessed 02-25-2021).
- 46 同上、1-9頁。

永井英子の信仰・愛・人生 —自分を貫くということ—

小林 瑞乃

はじめに

昨年2021年4月、青山学院大学に「スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」が設立され、7月に「ミッション×女子教育×ジェンダー—戦前キリスト教女子教育から現代へ—」と題して公開記念講演会が開催された。青山学院における女子教育の検証と継承を柱の一つとするジェンダー研究センターの企画として、戦前キリスト教女子教育の来歴を追い、果たした役割や独自性、ミッションの今日的意義などを様々な角度から提示し、これらをジェンダーの観点から検証して未来への可能性を探ろうという、いわば挑戦的な試みであった。

その趣旨を踏まえ、本稿は宣教師たちの女子教育による女性の育成とその薫陶を受けた女性達の歩みを具体的に追究するため、ドーラ・E・スクーンメーカーが設立した「海岸女学校」の卒業生永井（松本）英子の人生をたどり、その現代的意義を考察するものである。

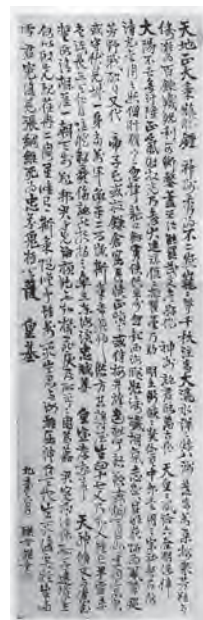
ここではその生涯を、キリスト教と女子教育の修養期、新聞記者としての活動期、アメリカでの充実期の3期に分けて概観し、さらに英子の人生を貫いている思想的な核心とその言説に通底するシスターフッドの可能性などについて探求していきたい。

1. キリスト教と女子教育の修養期

永井英子（ゑい子）（図1）は、1866（慶応2）年に千葉県木更津市で学塾を営む漢学者松本貞樹と母なほの一人娘として生まれ、幼少より神童としてその名が知られ、千葉県庁に呼ばれて墨書揮毫（図2）を披露して称賛されたという⁽¹⁾。



（図1）
1902年頃の英子



（図2）
幼時の筆蹟
（1875（明治8）年9歳頃）

後年英子は、父の人柄について、学問のみならず「小事にもいと忠実に、陰徳を以て身を任じつゝあり。人知れず幾多の功德を施したることは母より外に知る人なかりき」と回想し、また自分を普通の子どもとは違う育て方をして「われを尋常の婦人の如く家政の人とは目的せず、少くも世に知らるゝものとなれかしと」心血を注ぎ、「我学問、わが和歌、わが抜群の名を希望し給ひたることは我終生忘れ難き浩恩にぞある」と記している⁽²⁾。

また、父は英子を「男の子の様に育つる積りで、五ツの祝ひの時にも袴羽織を着せ、其名を呼ぶにも男子の如くゑい坊と云った」⁽³⁾。「家政の人」は眼中になく、現代でいうジェンダーフリーな教育によって一角の人物たるべく厳しく鍛錬されていたのである。

家には多くの塾生が寝食を共にし、主に和漢学、四書五経、手習、和歌、詩作等を教えながら、子ども心にも「精神教育に傾注」しているように見え、後に大学教授や代議士、有名な経済家、学校長、海軍少将、大商人などとなっていく、そうした人材を輩出したのであった⁽⁴⁾。

明治維新後、父は英子の将来をキリスト教女子教育に託すべく、学制布告後に塾を閉じて一家で上京した。こうして、父の友人である津田仙が1875年に開学に尽力した「救世学校」に学ぶことになり、翌年「海岸女学校」(図3)と改称した後は9歳の英子は最年少の寄宿生となった。生活を共にする中でキリスト教と女子教育を教えるスクーンメーカーなど宣教師の薫陶を受け、国語と漢文の教師も兼ねながら約9年間在籍した。1885(明治18)年に海岸女学校を卒業すると、四谷教会のバイブルウーマンとして伝道に専心した。



(図3)

ヴァン・ペテンと海岸女学校初期の生徒
Heathen Woman's Friend vol.XV
 (1884年3月号)より〔後列右側が永井英子〕

特筆すべきは、1884(明治17)年に刊行された日本語による初の讃美歌集『譜附基督教聖歌集』



(図4)

英子の讃美歌草稿
 (デヴィソン蔵1884(明治17)年版)



(図5)

J.C.Davison編『譜附基督教聖歌集』
 美以美教會雜書會社 1886年再版

聖歌集』(図4、5)である。讃美歌編纂者のデヴィソンと英子が共同で翻訳・編集に務めたもので、「あまつましみず ながれきて」(聖歌150番)など“不朽の名句”とされる美しい表現が深い印象を与えている。

1886(明治19)年には東京師範学校女子部(のち女子高等師範学校、現お茶の水女子大学)に入学し、外国人教師の授業通訳など「助教師」も兼ねる多忙さで過労による休学もあって1890(明治23)年に24歳で卒業し、華族女学校に勤務した。

1892(明治25)年、外務省翻訳官・哲学博士の家永豊吉と結婚し、1895年に男児を出産し、日清戦争勝利にちなんで勝之助と命名した。五歳になるまでは幸福であったが、「突然の出来事から」家は破産し離縁となって勝之助とも生き別れとなり、「生木を割くの思ひで可愛い盛りの一人子を残して家族四方に分散するの悲境に陥った」⁽⁵⁾。こうして、再び華族女学校や実践女学校の教員として身を立てることになった。

2. 新聞記者としての活動期

その後、1901年頃に津田仙の紹介で島田三郎の毎日新聞社に入社し、新聞草創期の記者として活躍することになる。当時の石川半山の日記には「初めて松本英子に会す。其以外の醜に驚けり」とある⁽⁶⁾。これについて、「半山の好みに合わなかっただけで、口元をきりりと結び、やゝ切れ長の目元、地味な和服に身をつつんでいる姿は、清楚な知性派女性を思わせる。もっとも半山より六歳も年上であった」⁽⁷⁾とする見方もあるが、単なる美醜なのかどうか、これだけでは判然としない。

記者としての転機は、1901(明治34)年11月16日、潮田千勢子らと鉍毒被害地を視察したことであった。英子は、潮田、矢島楫子、島田信子らと共に、田中正造と木下尚江の案内で谷中村や海老瀬村など激甚地を訪れ、その惨憺たる状況に驚いて、帰京の車中で救済婦人会結成の計画がまとまったのだった⁽⁸⁾。

以後鉍毒問題糾明に全力を注ぎ、広く世間に訴えていく。12月7日には潮田を会長とする鉍毒地救済婦人会を正式に結成し、被災地を探訪して慰問とともに丹念な聞き取り調査を行い、その現状を59回にわたってみどり子のペンネームで「鉍毒地の惨状」と題して『毎日新聞』(図6)に連載した。正造の直訴を前後して記事は大きな反響を呼び、老若男女の共感を呼んで救援活動は非常な盛り上がりを見せた。演説会を開催するたびに寄付が集まり、年末年始には大学生による大挙視察も敢行された。



(図6)

『毎日新聞』1902年2月26日

さらに救済婦人会は、潮田千勢子、英子、島田信子、木下操子の連名で「与古河市兵衛書」を送って、次のように鉱業停止を要求した⁽⁹⁾。

此無告の民等が貴下の事業たる鉱業の結果として家を失ひ妻を失ひ又は夫に別れ子に別れ或は狂し或は自殺し恨を飲んで死する者幾干なるを知らず（中略）百万の財宝も一人の生命には代へ難し（中略）請ふ省一省せられて可惜事業上に断乎たる中止の美拳を奏せられんことを

さらに1902年1月17日、鉱毒救済婦人会は「貴衆両院議員諸君に檄す」を議員に配布し、『毎日新聞』にも掲載した。この檄文は、英子の執筆したものである。

足尾鉱毒問題の声は今や天下を動かせり、纖弱なる婦人の手熱血なる青年学生の舌老衰せる下婢の眼活眼なる有力の腕も已に此問題の為にはただに同感同情に止まらず、熱涙を揮って此三十万無告の人民が救助に婦女は昼夜の別なく東奔西走し、青年は学窓の余暇寒風凜烈たる路傍に立ちて此窮民救助の演説を叫べり（中略）

嗚呼此問題たる渡良瀬沿岸四県三十万の人民過去廿年余の歲月之れが為に慟し之が為に哭するも世は之れを不視不問に附し去れり 嗚呼之れ何等の大罪ぞや 啻に一個人一政府の大罪たるのみならず又社会の罪と云わずして何ぞ 社会の腐敗と云わずして何ぞ 社会墮落の極点と云わずして何ぞ

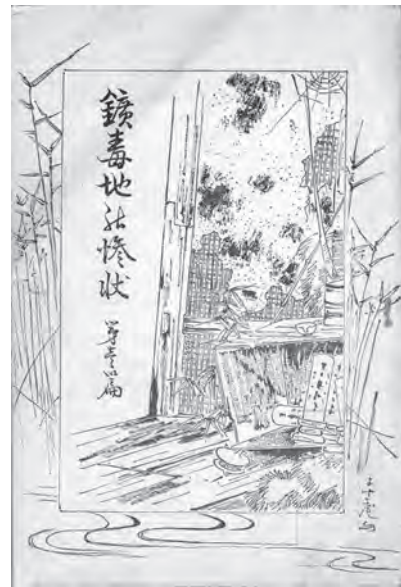
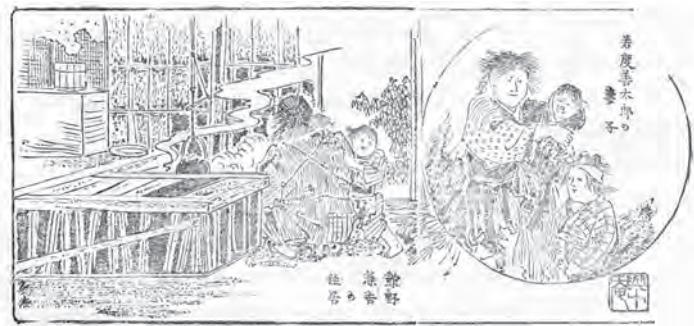
千勢子と英子らは食糧や衣服を分配するため埼玉県北埼玉郡川辺村・群馬県邑楽郡海老瀬村・栃木県安蘇郡界村など激甚地を度々訪問し、病人を治療のため上京させたりした。また、広く現地視察の呼びかけも行っていた。例えば1902年1月26日『毎日新聞』には次のような記事があり、「婦人団体の鉱毒地視察」として松本英子の名で女性達に呼びかけている。

救済婦人会は来る卅日（木曜）の祭日を期し鉱毒地視察の目的をもて団体を組織し被害地へ向け出発する筈なれば、有志の婦人には同日午前六時までに上野停車場まで御来会されし／汽車代は日帰りの人は金一圓八錢但し弁当御持参の事／古河駅午後六時発の汽車にて帰京の事／尚被害地に滞在して詳しく其状況を視察されたき方は御随意の事 お申込は尾張町毎日新聞社内松本英子宛にて来廿八日までに御申込ありたし

救済活動の中心的存在だった千勢子と英子は、京橋警察署から召喚され、2月3日に出頭した（『毎日新聞』2月7日）。しかし彼女達には取調べにひるんだ様子は全くなく、2月～3月は最も活動が盛り上がった時期であった。

広範な人びとを巻き込んで高まる輿論に対し、明治政府は1902年1月文部大臣から大学生の鉱毒地視察禁止命令を出し、政体変壊や朝憲紊乱、社会秩序風俗壊乱など新聞紙条例違犯で発売頒布停止と差押えを命じるなど毎日新聞への弾圧を強化しつつ、同年3月鉱毒問題調査委員会を設置した。

4月、英子の連載記事等を編集した『鉱毒地の惨状』(図7)が教文館より出版された。



(図7)
『鉱毒地の惨状』

英子の記事は、広く深く人々を見つめている。被害民の住所や氏名を記し老人や子供の様子、そこに暮らす女性達の語る言葉をその口調のままに拾い上げ、生活の状況や健康が悪化し眼病や胃病が広がる実態、病者や死者の続出、冬であるのに単衣だけの衣服を身に付け、ほとんど食事を取れずに餓死寸前にまで追い詰められた人々の実情などを詳細に記録している。現代に通じるルポルタージュであり、「圧倒的なリアリティーをもつ被害記録たらしめると同時に、被害民の貴重な肉声での歴史証言たらしめた、と高く評価できる」とされる所以である⁽¹⁰⁾。

研究史において早い時期に英子の記事に注目していた五十嵐暁郎は、毎日新聞の鉱毒報道において「頂点をなした」のは「鉱毒地の惨状」だとして次のように論じていた⁽¹¹⁾。

被害地の生活に深く入り込んだ筆者の目を通して、現地の悲惨な状況を詳さに人々に伝えたのである。そしてこの連載期間に『毎日』は、自ら伝える被害地の惨状につき動かされるように、鉱毒関係の記事を連日のように第一面のトップにかざり、鉱毒被害説さらに鉱業停止論へと、その論理をつきつめていった。転換したこの『毎日』の鉱毒事件報道が、その後新聞全体のこの事件に関する報道の展開の軸となったばかりでなく、世論の形成と支援活動の拡大にも重要な役割を果すことになるのである。

続編を出す予定が未刊のままなのは、義理堅い英子の関わった仕事としては考えられないことである。毎日新聞を退社し、同年10月横浜から単身渡米した。その理由は未だに謎に包まれているが、一つの手がかりが、同年4月28日付の内村鑑三から英子への返書であ

る⁽¹²⁾。内村鑑三は1901年4月に被害地を視察して以来鉍毒調査有志会の一員となり、木下尚江、島田三郎らとともに演説会で熱心に鉍毒問題を訴えた一人だった。この内村に、英子は何か相談をしていたのである。

扱御申越の件に就ては小生も薄々伝聞仕り、如何の事にやと心竊に苦慮致し居り候、然れども只一方より聞えし事なれば能く其真相を知る能はず、故に謹んで之を心に秘し、一切之を口外には出し不申候、それと申すも一は滅亡に瀕し居る日本の社会の事なれば何にか同胞の非事あれかしと附け狙ふ折りなれば、些少の瑕瑾も直に大失策のやうに風聴され候故に存候、御互に斯かる腐敗極まる社会に棲息するには充分の注意を要すること、存候

この書簡から、英子について何か風評が立って困っていた事が分かる。内村はその風聞を聞いて口外せず内心苦慮していたとして、「腐敗極まる社会」で生きるには充分な注意が必要だと諭してる。それに続く次の文面から、その風評が鉍毒運動に関わる問題であったことも示されている。

又鉍毒運動の今日まで取り来りし方針の如何にも皮層的にして、斯かる方法を以て此大問題の到底解決せられざるべきは最も明白なる事と存候、小生は輿論を起すと称して只僅かに浅薄なる社会の感情にのみ訴へ来りし今日までの方法の寧ろ害有て益なきを信ずる者に御座候、小生は斯かる場合に於ける我等の取るべき途は明白に聖書に示しあること、存候、幸に貴姉に於ても、今回の御困難を機会として此問題の解決に関する神の聖旨の何処にあるを了せらせ、貴姉の筆と熱心とを其方面に御向けに相成り候はゞ神は必ず再び貴姉を恵み、貴姉を目下の困難より救ひ出し給ふのみならず、貴姉の終りをして始めよりも更に幸福ならしめ給はんと確かに信じ申候、

斯くブツケに申上候は甚だ無礼のやうに相見得エ候やも知れ不申エ共、キリストに在て貴姉を敬するより申上候間不悪御承了被下たく候

ここには、内村が輿論の喚起といって「浅薄な社会の感情にのみ」訴えてきたこれまでの方法を必ずしも良く思っていなかったことも明示されている。これを読んで落胆やショックを受けたか、あるいは反対に、運動から退く自分を納得させる一つの理由となったのか。問題解決に全力を注いだ英子が、この書簡をどう読んだかを示す資料はない。

とはいえ、英子には「困難」が降りかかっていたのであり、それは恋愛問題であった可能性がある。後年になるが、正造は日記に次のように記していた⁽¹³⁾。

矯風会の潮田千勢子の前には松本女子も義婦人なり。毎日新聞にては天晴文章の達人なり。左部某の前には忽ち磊落多情の醜婦と変る。

左部某とは、左部彦次郎のことである。左部は東京専門学校（現早稲田大学）卒業後に鉋毒事件に奔走し、英子の記者時代は正造の右腕として活躍していた。その左部との関係が噂されていたのである。

4月以降、運動の退潮や毎日新聞紙面から鉋毒関連の記事が少なくなっていくことなども指摘されており、そうした要因も否定はできず、日本への深い絶望を感じていたとしても不思議ではない。だが潮田はなお活動が続けていたのであり、そこから離れるのは尋常では無い。後年再婚する永井元は、英子の性格を次のように記している。

金銭に対して几帳面であった英子は他の総てのことに於ても皆其の通りであった（中略）如何に些少のものでも己れに属する理由のないものは決して之を己れのものとしなかった。之は昔気質の父母の厳格なる教訓にもよったろうし、又子供の時から宗教々育を受けて居たからでもあらうが、常に公明正大にして、人から指一本でもさゝるゝ如き行為をしなかった。又極めて義理堅い気質で、人から何か物を貰へば必ず返礼をするのが例となった居た。⁽¹⁴⁾

こうした英子の性質からすれば、特別な理由もなく辞めることは考えにくい。英子は鉋毒事件に関わる女性記者として目立つ立場にいた。恋愛関係など何らかの自身に関わる噂が鉋毒運動に悪影響をもたらすことを考慮して、運動から手を引いた。一見潮田を見捨てたかのようにみえる行動だが、むしろ潮田や鉋毒事件の責任追及のさなかにある支援活動の足を引っ張ってはならない、関係者に迷惑をかけまいとしての選択ではなかったか。今のところ、私はそう解釈している。

3. アメリカでの充実期

英子は2年程ひっそりと暮らしていたが、その後は持ち前のエネルギーで人生を切り拓いていく。1902年10月末にシアトルに到着し、1903年1月末にシカゴへと出発する。が到着早々大風雪で馬車の事故にあい、数カ月間ある富豪のアメリカ人女性に引き取られ、全治するまで世話になった。その後、ニューヨークでは「ミス・ヴォルジモヤ・ヤング」という熱心なカトリック信者と出会い、看護婦になることを勧められ、彼女の斡旋で大病院ルーズベルト・ホスピタルの「特待見習い生」となるが、「自分に適せぬことを知って辞した」。シカゴに着いた時からペンネーム井出玉子（タマ・イデ）と称した⁽¹⁵⁾。

1905（明治38）年のセントルイス万国博では折からの日露戦争で注目をあびていた日本の商店は好景気で、サンフランシスコのドライ商会小池實太郎を手伝って英子も売り子となり、最終日にはくじ引きで売る方法で在庫を一掃するなど売り上げに眼を見張るような活躍をして小池を喜ばせた。

開会中にアメリカ人に多くの知人ができて、同市カークウッドに休養を兼ねて滞在することになり、「同市美術学校の校長で大の日本蟲眞なるローバー氏 其他社交界の花形デキッグス夫人を初めとし多数の婦人たちに勧められ」、日本及び日本人に関するレクチャーをすることになった。ローバー校長の斡旋により「戦捷国日本婦人の講演」ということで所々の婦人クラブや学校などから招待され人気となり、多忙で愉快的な日々を送っていた⁽¹⁶⁾。

着物姿の「タマ・イデ」(井出玉子)が日本人やその文化を語る講演が各所で企画され、好評で新聞記事(図8)にもなった。セントルイスの日刊紙『グローブ・デモクラット』の記事によると、講演は「戦争の為め寡婦となった日本婦人救援の資金を得るため」であり(6月7日)、「日本の婦人は一旦良人を失なへば再婚しない習慣だから戦争寡婦を援助する必要がある」と語り「敵国の露国人に対して尊敬はして居ても悪いことは一言だに云はなかった」(7月7日)と報じられている⁽¹⁷⁾。

その後英子はサンフランシスコに移ったが、実は小池の妻はま子は海岸女学校の出身であったため、玉子が松本英子であることがわかってしまったという逸話がある。しばらく小池宅に滞在した後、同年暮れに黒澤國手という医師の家に転宿し、青木大成堂で出版予定であった加州英語読本教科書の和訳の依頼を受けて翻訳に従事した。その校訂を依頼されたのが元新聞記者で保険代理店を営んでいた永井元で、度々顔を合わせる機会があり元と同郷の金井重雄が二人の間を取りもって、翌1906(明治39)年1月に英子は再婚した。元は友人が多く、帝国ホテルで結婚式を挙げると山ほどの贈り物が届き、披露宴には領事館員、新聞記者、宗教家、実業界の人々など来会者は二百名近く「未曾有の大祝会」といわれたほどだった⁽¹⁸⁾。

同年4月にサンフランシスコ大地震が発生すると冷静迅速な判断でオークランドの知人内海医師宅に避難し、タイプライターや重要書類等を持ちだしていたため保険業務も可能であった。サンフランシスコの大火事は三日三晩続いて市の三分の一を焼き尽く、多くの同胞は数カ月のテント生活になった。夫妻は救済会を立ち上げ、アメリカ人の救済会と連携しつつ、英子は日米の知人に書面で連絡し寄付金品を集めて罹災者に分配し、日系避難民の力となった⁽¹⁹⁾。

一段落した同年7月からは以前から学びたかったというフランス語修得のため、カリフォルニア大学バークレー校の夏季講習に通ってフランス語と英文科の二科目を、元はその時に特設された保険学の講義を聞いた。それが終わると特科生として仏文学を学んだ⁽²⁰⁾。



(図8)

講演について伝える新聞記事
(1905年 ST. LOUIS POST-DISPATCH)

其頃から段々面白みが附いて来たと見えて一生懸命に勉学し始めた。当時ゑい子は私のビジネスの方は一切関係せず、勉学の費用書籍諸雑費は皆私より支出し、私の収入がどれ丈けあるか、家計の方がどれ丈けかゝるか杯一切関係せず、たゞ私共のため食事を作ることゝ洗濯などは皆ゑい子がやって居た。1906年、7年の学期がすむと又兩人で夏季学校に出席した。中年以上の男女が本をかゝえて校庭を往き来するさまは見もので有ったらうが、私共は此頃が最もハッピーの時であった。

大学で学ぶことを勧めて費用を負担して見守り、二人で夏季講習に通った頃を「最もハッピーな時」だと振り返る元は、英子と共に学び成長を目指すような男性であった。英子は最高の理解者、パートナーと共に充実した日々を生きていたのである。

英子はラテン系統の国語を学ぶロマンチック文化という専攻科目で学び、1909年の春期にはイギリス、フランス、スペインの文学を修め、夏季学校は四年継続し、1910年の春期には植物学と東洋語も履修し、105以上の単位を取得したが普通学科でなかったため学位は与えないという規則だった。そこでこれまでの修得単位をもって本科生として待遇するというスタンフォード大学に1911年の春期から通うことになった⁽²¹⁾。

しかし食事を取れぬほど勉学に励んで体調を崩す英子を見た元は、直ぐにサンフランシスコに引き上げさせ、秋から再び、パシフィック大学に入学した。在学二学期で二学位を授与されることになったからである。元によれば「之にはゑい子を幼年の時から知って居る美以教会の老教授ミルトン・エス・ヴェル博士の努力が大に與って力あった」。「在学中は加州禁酒会長ドール夫人の家と、ルース嬢の家に止宿し」、サンフランシスコへは一カ月に一度程帰り、元も時々土産などを持って訪問し、毎日のように手紙をやり取りして互いをいたわり支え合った⁽²²⁾。



(図9)

1912年 大学卒業時の英子

1912(明治43/大正元)バチェラー(学士)及びマスター・オブ・アーツ(文科修士)の学位を授与され卒業した(図9)。その時の様子を、元は次のように記している⁽²³⁾。

1912年4月23日、愈々卒業式。二枚の立派な卒業証書を授けられて私共兩人満足は此上も無かった。何よりも先づ第一に故郷にあるゑい子の老母の許に吉報が送られた。老母からは真実こめたる喜びの手紙が来、私へも懇篤な礼状が来た。ゑい子は大喜びだった。此時私はゑい子に「丁度いゝ折であるから帰国してお母さんに安心させて来なさい」と勧めたが、「ホホさんの事が心配だから」と云って、どうしても承知しなかった。

元は「ちゃん」付けで、英子は元を「ホホ」の愛称で呼んだが、「ホホとは私を呼ぶ代名詞で、世間の人の様に『あなた』とか『モシモシ』など、私を呼ばなかった」⁽²⁴⁾。二人は仲睦まじい夫婦であった。

元に支えられた英子は今度は自分の番だとして卒業後は元の保険業に携わる。契約者獲得のため彼らは広告・宣伝を駆使した。ペナントや旗を担いで街をねり歩いて人々の注目をひき、併せて新聞に「保険大募集」の広告を載せ、その夜から続々加入者を獲得するなど様々な手法を試みて成功している⁽²⁵⁾。

何事にも一意専心になる英子は「学校に在れば書物を一分間も手からも心からも離さず、保険をすれば全力を籠めて之に打ち込」み、次第に「寝ても覚めても保険の事より外に余念がな」く、新聞社からの依頼原稿は「いづれも業務の余暇に成ったものである」。

夫妻は「今までの素養を応用して、印刷物、個人宛の書面、及び新聞広告等に全力を傾注し」、出来たばかりのエデソン・デッキという当時の「最新式の輪転ミミオグラフ機を応用し、書いたものを直ぐ印刷し」郵送できる「最も迅速のやり方」を駆使し、「個人宛書面には面と向って語るよりも一層強力なる熱誠こめたる筆法を用い、新聞広告には生氣滂濶、嶄新、飛び附いて来たくなる様なインヴァイティングな文句を用ひた」。

例えば「ゑい子十二箴」は1912年12月12日正午12時に印刷発行し、「之を出来るだけ多く印刷し、出来るだけ多くの人に配附し、出来るだけ多く保険のプロパガンダをした」。こうして工夫を凝らしたダイレクトメールによる勧誘で契約者を増やし、全米保険代理店の高額契約成功者に選ばれるほどの成功を収め、ビジネスでもその才能を発揮したのであった⁽²⁶⁾。

1913年6月末、カリフォルニア州の日本人の中で初めて元と英子は高額契約獲得の荣誉である二十万ドル倶楽部員に選ばれ、9月にホットスプリングの大会に招待され豪華な優待旅行を味わった(図10)。その大会に出席したのは全米八千人中の二百人程で、日本人は永井とシアトルの内村啓三だけであった⁽²⁷⁾。これはニューヨーク生命の「代理人奨励法」で、倶楽部員になると名勝地に招待したのだった。1914～15年は十万ドル倶楽部員であったが、1916年～1919年は四年連続で二十万ドル倶楽部員に選ばれ続けた⁽²⁸⁾。



(図10)
東部旅行中の英子〔右から2人目〕
(1913年シカゴにて)

大会に出席するため様々な都市を旅したが各地で日本人の友人・知人達に歓待され、1917年の旅行で訪れた都市の一つシカゴでは「基督教ミッションの幹事谷繁始氏始め多数の会員諸氏から厚遇を受け」「同氏の案内でノルス・ウエスタン大学、米国婦人矯風会本部を訪問し、ゑい子は最も満足した」⁽²⁹⁾。1918年と19年はあまりに多忙で大会を欠席し

たほどで、その頃彼らは自分達で“奨励法”を作り、次のように生活に潤いをもたらす工夫を考え出していた⁽³⁰⁾。

ビジネスの良かった日は夕食をカフェテリアですませた後に活動写真を見ることにした。之が大に当って、度々活画を見て新知識を得ると同時に、新元氣をも加へて私共を復活させたこともあった。

1923 (大正12) 年7月から、英子は毎日夕食後の1～2時間に文章を書くようになった。初めは簡単な日記のようなものから、日々の出来事とそれに関する批評や感想、和歌や絵なども書くようになった。英語やフランス語で、後に日本語で書くようになってから、これらを「ゑい子つれづれ草」と名づけた⁽³¹⁾。

この頃から、読書欲・知識欲も旺盛となっていった。次第に進行していく病と闘いながらフランス語原典の読書に没頭した。病苦を忘れるためでもあり、治ったら欧州旅行をしようと考えていたからであった。1923年～25年頃はルソー、フローベル、モーパッサンの各全集より、ピエール・ロティも少し読み、『家なき子』で知られるエクトール・マロを最も愛好した。1926年には1年がかりでバルザック全集を読了し、1927年からゾラを読み始めた。それだけでなく元と「共に研学した科目は、世界平和論、マダム・エデー、最近には日本文学をも共学したので、仏語の進行が遅々たる事もあった」。それでも『居酒屋』『壊滅』など15巻を読み、『ジェルミナール』下巻三分の一程まで読み進めていた⁽³²⁾。

病床には栗屋栄子や安孫子よな子など、海岸女学校の同窓生も訪れている。元は1926年5月に辞表を提出して翌1927年1月に許可され、英子の看病に全てを捧げた。フランス語の師の説く「クリスチャン・サイエンス」を心の支えにしつつ死に向き合う夫婦の日常は、今日でいう代替医療や終末期医療などにも通じるものがあり、死を思索する意味なども含め考えさせられる。

夫婦はよく様々な事を語り合い、二人にとって死も恐れるものではなかった。1927年7月、「我等が後事に関する其一」として素志を書き記した中には、次のようにある。

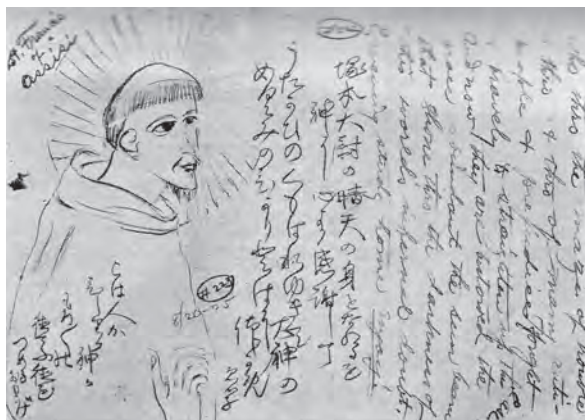
習慣上我等は「死」といふ。されどこれを其他面より考ふれば、永遠の宇宙に於ける小さき変化に対する一の現象に過ぎぬ。(中略)我等兩人(永井元。永井ゑい子)は普通の考と異なりたる考をこの点に於て持つものなれば、若し人の称する「死」なるものが我等に来る場合、我等は悦んでこれに面しこれを迎へんとするものである。そは我等は此世界なる学校を卒へ人生のより高き程度に入り、此世に於て学び得ぬことや、不完全なる経験を完全ならしむることが出来るであらう

それに続け、現在普通に行われるような葬儀ではなくごく簡単に少人数で執行することなど葬儀に関する要望をしたためたこの「我等が後事に関する其一」に兩人で署名し、そ



(図11)

『永井英子詩文』表紙装丁
(手記の一部がデザインされている)



(図12)

手記の中に描かれた「聖フランシスコ」(1925年8月20日)

の証人としてジョン・マクカラン氏に持参することになっていた。香典・造花・弔辞なども禁じ、「友よ、我等が為に時と金とを消費し給ふな。其時其金をより有益の事、積極的なこと、大切な事に消費し給へ」といったメッセージも残している⁽³³⁾。

献身的な元に支えられて最後の日まで学び続け、1928(昭和3)年4月英子は夫に看取られ息を引き取った。62年の生涯であった。

一周忌にあたり、元は1400頁にも及ぶ大著『永井英子詩文』(非売品)(図11、12)を出版する。そこには夫婦愛とともに同志的な絆をも感じさせられる。元は聡明な英子を敬愛し、その存在証明として後世に残すべきと考えたのだろう。

この豊かな思想的遺産によって、私達は彼女の軌跡や言説を知ることができる。その中には、日清・日露戦争下の日本、さらに第一次世界大戦時のアメリカの実情を見るなかで、1918(大正7)年『在米婦人新報』に発表した「嗚呼戦争」「軍国の婦人」などを始め、1926年「如何にして戦争を世界より消滅せしめんか」、1927(昭和2)年の論説「非戦のために戦へ」など書き続けていた非戦論などが特に注目される貴重な記録となっている。

4. 愛と奉仕の精神

英子の没後、鉍毒問題に深く関わった永島与八はサンフランシスコの救世軍にいて元を訪れ、そこで彼の妻が松本英子であると知って驚嘆する。そして、30年ぶりに異郷で邂逅したことを感慨無量であるとして、霊前に拝げるべく、鉍毒事件と英子の思い出を次のように書き綴った手紙を元によこした⁽³⁴⁾。

田中正造が議会で「之を国家問題として大に絶叫せられ」政府に解決を迫ったがなかなか手を下さず、「被害民の窮苦困憊は日一日と悲惨の極に達し、終に死に物狂ひとなって大挙上京泣訴哀願するの止むなきに至」り「端なくも兇徒嘯聚被告事件てふ、之れ又前例なき疑獄事件を惹き起こし」、鉍毒事件の真相が社会に知られ篤志家や宗教家などあらゆる

る方面から「奔走応援せらるゝに至ったのである」。

就中婦人として尽力せられたのが松本ゑい子女史であった。女史は文筆を能くせられ、当時毎日新聞記者として、紙上に其健筆を揮って鉋毒地の惨状を社会に訴ふると共に、他方また鉋毒被害地救済会長島田三郎先生、及び其副会長潮田千勢子女史と相携へて、日夜東奔西走せられたのである。

斯くて天下大小の新聞雑誌が筆を揃へて鉋毒事件の真相を書き、又政府当局の怠慢と古河市兵衛の無情とを論じ更に又被害民に同情せらるゝ記事を掲げたる結果、日本全国の輿論が喚起せられ、従って学者、有力家、学生までが起って極力運動せらるゝに至った。而して毎日数百円の義捐金と、数個の貨車に満載された古着類が贈り越さるゝと云ふ有様であった。

その後帰国した永島与八がこの約10年後の1938年に大著『鉋毒事件の真相と田中正造翁』を執筆することを想うと、この偶然の巡りあわせにはやはり感慨深いものがある。

英子らの足尾鉋毒事件への尽力は、日本の女性が集団で社会的運動を行った嚆矢として記憶されるべき取り組みである。と同時に、その活動がキリスト教徒の当然為すべきこととして実践されていたことにも留意したい。

鉋毒問題への世論の喚起や支援活動に、キリスト教徒、特に婦人矯風会が重要な役割を果たしたことは既に指摘されており、「婦人団体が運動の中心となったところにも、この運動の、他の政治運動とはことなつた、むしろ今日の住民運動にも通じる性格の一端」がうかがえると評されている⁽³⁵⁾。

潮田千勢子らの結成した鉋毒地救済婦人会によって「運動はまずキリスト教界に浸透して」いき、「教会内部の人々の支援活動への参加を見るように」なり、次のような状況が生じたという⁽³⁶⁾。

キリスト教界内部への運動の浸透の様子は、この年（1901年）11月末から急増した毎日新聞社に寄せられる義捐金・投書のうち、教会およびクリスチャンによるものが圧倒的に多いことにも現れている。後述する学生の大学現地視察には、三百余名の都下キリスト教徒男女が参加しているし、翌年1月25日横浜蓬萊町美似教会において開かれた京浜連合鉋毒救済青年大演説会には、約500人の聴衆が参加し、また2月11日平河町麴町教会青年会主催の演説会は1,000人余の盛会であった。一方では、京都四条教会牧師が被害地視察を行なうなど、運動の地方への波及に教会のルートは大きな役割を果たしていたと思われる。

クリスチャンのネットワークによって人々の自発的な支援活動をよび、救済婦人会の千葉・横浜支部が誕生するなど地域的広がりをみせ、各地を巡回しての講演会は現地視察の

呼び水ともなり被害民の実感するところとなった。また医師や弁護士など各団体が議会に請願書を提出するなど議会・内閣への要請も広がっていった。こうして世論をリードしたクリスチ안의知識人について、「鉋毒事件にたいする彼らの態度に共通するのは、言うまでもなくキリスト教人道主義」であり、島田や木下、また仏教界による取り組み、学生をも含めて「この支援活動全体に共通する動機」は「人道主義的立場」にあり、「あるいは被害民の境遇にわが身を置く深い同情が、この運動を支えた基盤であった」とされている⁽³⁷⁾。

後年のことになるが、「最も尊き賜物」として英子が挙げたのは、「強壮なる健康、智識を追究する心、そして神を天父と仰ぎ正義人道を愛する宗教道德の精神」であった⁽³⁸⁾。「正義人道」は抽象的な概念ではなく、実践倫理のように具体的な行動を導くものだったといえるのだろう。

女性クリスチャン達にとってみれば、鉋毒問題に参加する以前に社会的実践の経験は積み重ねてきており、英子もその一人としてリーダーシップを発揮していた。例えば1891年（明治24年）の濃尾大地震では当時死者四千人、負傷者集不明、被害地は三重、愛知、滋賀、岐阜、福井の5県にわたる大惨事であったが、その際にも救済活動に尽力していたのである⁽³⁹⁾。

帝室よりも三千圓円の御下賜があった程で其惨状全国民の耳目を轟動した。ゑい子は在京有志の婦人達と慈善会バザアを企て、自ら其衝に當り、綱引き後押しの俵に乗って四方に奔走し、慈善演説会は九代目團十郎の義捐的出演により大成功を収め、巨額の金額を得て之を罹災民に寄附した。蓋し斯る活動的仕事は元氣旺盛時代の彼の最も得意としたところであつたらしい。

1906年4月のサンフランシスコ大地震においても英子は元と救済会を組織して邦人の救援活動に尽力したことは前述したが、さらに彼女が継続的に意を注いだのは、子どもの教育であった。大学卒業後の1912年夏、小学校の休みになると「日本人の子女等は行く所がないので皆サイドウオーク（人道）に群をなして遊んで」いるのをみて英子が発案したのが日本人初の夏季学校だった⁽⁴⁰⁾。リフォームド教会の森淳吉牧師に提案すると、「良しと思へば直ちに実行した森牧師の賛成を得て」すぐ実施することになった。

初めての試みである。同胞中夏季学校の何ものなるかを知る人すら稀であった当時に、ゑい子は率先して子供のある家々を訪問し、多数の少年少女を自ら手をひいて集めて来た。先生としてはミス田堂（今はメキシカリの大牧畜家梅澤夫人）のやうな男も及ばぬ威勢のいい人達がゐた。鳩ポッポだの、桃太郎だの、子供と一緒に手を叩き歌を歌ひつゝ、教へたりさまざまのお話しをして子供達を喜ばせた。そして子供の歸る時にはまた手を引いて一々家へ送り届けるのであった。数週間後学校は大成功

裡に目出度閉校した。彼の発案による此新しい試みが斯くも好結果を得たことは英子として非常な満足だった。

好評であった夏季学校とその後について、元は次のように記している。

リフォームド教会としても同胞社会最初の夏季学校を興して範を永く後代に残すことが出来た。父兄達の喜びは無論大きかった。此同胞最初の夏期学校に生徒として来た少女の中には既に一家の主婦となってるものもある。少年の中には大学を卒業して一廉の紳士となってるものも少なくない。少年教育には日本に居た時にも経験があるので、後年保険業に専心従事する様になっても此方面の注意を常に怠らず、度々新聞にも教育問題を書き、学校には屢々寄附金をした。

1923年の関東大震災に際しても、英子は同胞の被災の過酷さを思いやって強く救援を呼び掛けていた。

どうしたら何百万の家なき人々に一枚宛でも毛布を贈る事が出来やうか。どうしたら彼等が肌着の欠乏を充すことが出来るだらう。故国の同胞が活地獄の苛責に遭ひつゝあることを想へば、救済は我等が力のあらん限せねばならぬ（中略）故国では焼き出されの負傷者や、病人が、又その大風雨に襲はれて、一枚の着たまゝの着物がびしょぬれになって晒されて居る。これからの寒さを野中の天幕内で、どうして凌ぐことが出来やうか。

救済は一時のものでない。彼等同胞が再興再建の暁に達するまで、相当の時日を要する。小さい我等の同情の涙も集っては大なる力ともなう。子供のキャンデーに費やすべきペネーも一万人が毎日一ツツ積み立てれば、一年の終りには三万六千弗の金額となる（中略）在留同胞は一人も残らず此決心と断行とをしてほしい。今旧習に囚はるゝ場合ではない何でもよい事はどしどし進行せねばならぬ時である。御同意の方は沢山あると信じます。其御姓名を婦人新報まで御通知下さい。そして節約同意と記して下さい。

「救へ故国を」『在米婦人新報』1923年10月⁽⁴¹⁾

「救済は我等が力のあらん限せねばならぬ」という一語が端的に物語るように、英子にとって同胞が惨状にあえぐことなど決して見過ごせない事であり、救援に立ち上がるのは必定の、なすべきこととしてあった。その精神には父の教えと共に、キリスト教女子教育によって培われた愛と奉仕の精神というものの、一つの典型的な在り方が示されている。

おわりに

鉾毒地救済婦人会の中心となった千勢子と英子は、以前から共にバイブルウーマンとして奉仕活動に身を捧げ、貧民窟の子どもたちを慈善旅行に引率した経験などもあった。これまで懸命にしてきた経験に裏打ちされて、彼女達は貧困家庭の実情に心を砕き被害民の生活苦を拾い上げる視野があった。それ故に人々から丹念に日々の暮らしの辛さを聞き出すことができたのだろう。長年の教育・奉仕活動によって養い培ったものがあったからこそ、『鉾毒地の惨状』は書けたのだと思えてならない。

1902年2月21日、鉾毒地の女性達は国会議員への陳情のため上京した。その後も鉾毒地からの女性達の上京請願は続き、『毎日新聞』では氏名や年齢、日々の動向などが報じられた⁽⁴²⁾。上京した彼女らを支援しバックアップしたのが、救済婦人会と『毎日新聞』であった。惨状に苦しむ人々、この冬を越せず死にゆく人々を何とか救いたいという熱い思いが女性達を突き動かしていた。その支援活動の意義は高く評価されつつも、矯風会メンバーの階層構成や生活、教育レベルなどから上流階級の女性の視野の狭さや限界などが指摘されてきた⁽⁴³⁾。むろんそうした側面はあっただろう。

だがそもそも、女性の集団による社会問題への支援と活動は日本にはかつてないことであった。首都東京から直接支援物資を手渡すために度々現地を訪れるという機会は現地の女性達とも互いを知るきっかけになるのであり、集まった義捐金や衣類・食料の寄付によって多くの人々の支援の輪が広がっていることを実感させたはずである。そうした全てが、現地の人々、特に女性達を勇気づけ励ましたのではなかろうか。それが、2月に鉾毒地から集団で上京請願を行った背景にあると私は思う。

また、義捐金を寄せた人々は確かにキリスト教徒が多数を占めるが、それだけではない。婦人救済会は思想信条を問わない広範な支援活動の輪を広げていたといえるのである。同胞の惨状を黙ってみてはいられないという一念で動き出した彼女達の活躍と社会への影響力は当時の男性達の想像をはるかに超えていたのであり、その結束力、決断力、実行力にみるシスターフッドは、現代社会を照射する意義を有しているのである。

後年になるが、次のような英子の平和論には、それを受けとめる女性達への強い期待と信頼がある。

婦人の力大なり。婦人は平和の使者である。婦人が結束して立ち此の使命に卒先猛進するの精神を奮ひ起さば、此希望は希望に止まらず、必ずや実行の日を見るであらう。

「全世界の非戦記念日」『在米婦人新報』1926年1月2日⁽⁴⁴⁾

英子の平和論・非戦論についてはまた改めて論じるべき今後の課題であるが、家庭の枠を越えた実践を促したキリスト教女子教育で育った女性達の連帯や同志的絆といった経験など日本での原体験も視野に入れて探究していきたい。

見知らぬ異国で再出発し非凡な能力を伸長させた英子は、元の理解と支えによって知的欲求・向学心に突き動かされるように思う存分に生き抜いた才気煥発な女性であった。と同時に、子どもと貧困、被災者、鉋毒被害者など社会の底辺にあえぐ人々のために知力の限りを尽くす姿勢が精神の基底にあり、非戦論へと持論を展開させたジャーナリストとしての不屈の魂をも見る思いがする。「世の革新家たるの希望」を抱いていたと英子的心情を汲み取って、元は次のように記していた。

若し思想界の人たらんにはルーソーの如く、大宗教家たらんにはアシ、の聖フランシスの如く、教育家として知らるゝならフローベルの如く、将た又ヂヨリナリストとしてならエルバート・ハバアドでありたく、人の妻として愛国家たらんにはマダム・ローランドの如く、歌人又はエッセイストならばゑい子自身其儘でありたしと、英文日記の内に記して居る。⁽⁴⁵⁾

ミッションと女子教育への情熱ゆえに海を渡った宣教師によって薫陶を受けた日本の女性の一人として、自己の能力を存分に発揮してその生を花開かせた英子であった。その教育的土壌と知的基盤があつてこそ、たぐいまれな個性と才能が開花したといえよう⁽⁴⁶⁾。それはまた、まだ知られざる、個性あふれる女性達の生が無数にあることをも示唆している。女性として、キリスト教徒として、弱者に寄り添い、社会変革を志して生きることは、当時の日本では苦難を余儀なくされたのだった。だからこそ、等身大の女性として、多くの矛盾に直面しながら人生を開拓し続けた英子の生き方を胸に刻みたいと思う。

【注】

- (1) 「維新前後の志士仁人烈婦義僕等の伝記を列記」したという三尾重定の著書『文明餘響』（明治11年6月出版）の第一の所に「幼児廳中に和歌を録す」という題で英子（名前は登波子となっている）のことが記されているとして『永井ゑい子詩文』9～10頁に全文引用されている（『永井ゑい子詩文』を以下『詩文』と略す）。
- (2) 『詩文』948～949頁。
- (3) 同前、7頁。
- (4) 同前、952頁。
- (5) 同前、29頁。
- (6) 1901年9月14日。下山二郎『足尾鉋毒と人間群像』国書刊行会、1994年、127頁より引用。
- (7) 同前。
- (8) 永島与八『鉋毒事件の真相と田中正造翁』明治文献、1971年、507～510頁。
- (9) 『毎日新聞』1902年1月12日。
- (10) 福井淳「木下尚江・松本英子―足尾鉋毒事件の解決を目指して」（土屋礼子、井川充雄編著『近代日本メディア人物史ジャーナリスト編』ミネルヴァ書房、2018年）、28頁。

- (11) 五十嵐暁郎「内閣鉋毒調査委員会と“鉋毒処分”」（鹿野正直編著『足尾鉋毒事件研究』三一書房、1974年）、338頁。
- (12) この書簡は松本家から発見されたという（府馬清『松本英子の生涯』昭和図書出版、1981年、77頁、90～91頁参照）。ここでは『内村鑑三全集36』（岩波書店、1983年、518～519頁）によって記載した。
- (13) 1909年8月5日の日記（『田中正造全集 第11巻』岩波書店、1979年、291頁所収）。下山前掲書134頁参照。また「二人の親密さは運動関係者の周知の事実だったと、萩原進著『足尾鉋毒事件』にある」という（江刺昭子『女のくせに 草分けの女性新聞記者たち』インパクト出版会、1997年、128頁）。
- (14) 『詩文』653頁。
- (15) 『詩文』、261～262頁。
- (16) 同前、263～264頁。
- (17) 同前、266～267頁。
- (18) 同前、267～271頁。
- (19) 同前、271～277頁。
- (20) 同前、277～279頁。
- (21) 同前、280～281頁。
- (22) 同前、282～285頁。
- (23) 同前、285～286頁。
- (24) 同前、642頁。元は病床の英子をいたわり親しく呼ぶときは「ちゃん」をつけていた（同前、661頁）。
- (25) 同前、294頁。
- (26) 同前、296～297頁。
- (27) 同前、297～300頁。
- (28) 同前、305頁。
- (29) 同前、312～313頁。
- (30) 同前、314頁。
- (31) 同前、637頁。
- (32) 同前、648～650頁。
- (33) 同前、1284～1287頁。
- (34) 同前、36～39頁（1928年7月30日の日付の記載あり）。
- (35) 五十嵐前掲論文、339頁。
- (36) 同前、五十嵐論文、342頁。また齊藤秀夫「足尾鉋毒被災民救済運動とキリスト者」『日本キリスト教団横浜上原教会百年史編集ニュース』第21号、1970年11月29日（『横浜上原教会史料Ⅱ』日本キリスト教団横浜上原教会百年史編集委員会、刊年不明、所収）参照。
- (37) 同前、344～345頁。さらに五十嵐は、救済婦人会に對外硬派の論者が含まれていることから、

鉍毒事件に関心を寄せた世論は、人道主義や被害民への同情の基盤の上に、デモクラティックな志向とナショナルな心情といった「一見矛盾する思想が複雑に交錯して形成されていた」と論じている（同前、345～346頁）。英子も含め女性キリスト者には愛国的心情も強く、様々な立場や思想を糾合しうる、デモクラティックでナショナルな心情を内在させたキーワードとして「人道（主義）」の意義があったと考えている。これについては、今後の課題として更に検討していきたい。

(38) 1920年1月「在米婦人新報」（『詩文』403頁）。

(39) 『詩文』、27～28頁。

(40) 同前、292～293頁。（人道）は原文のまま。

(41) 同前、353～355頁。

(42) 他紙でも「鉍毒地の陳情婦人団、貴族院に座り込む」（『時事新報』明治35年2月21日）など報じられている。この「押し出し」と呼ばれる女性達の上京請願の一連の動きについては田村紀雄「押し出し—農家の女たちの登板」（『田中正造をめぐる言論思想—足尾鉍毒問題の情報化プロセス』社会評論社、1998年所収）参照。

(43) 例えば、竹見智恵子「足尾鉍毒事件の中のおんなたち—非暴力不服従の闘いの先駆として」（奥田暁子編『マイノリティとしての女性史』三一書房、1997年）、山田知子「足尾鉍毒事件と女性運動—鉍毒地救済婦人会を中心に—」（『大正大學研究紀要』第97輯、2012年）など参照。

(44) 『詩文』488頁。

(45) 『詩文』642～643頁。

(46) これについては「青山学院草創期におけるキリスト教女子教育をめぐる一考察—「海岸女学校」卒業生松本英子にみる新しい女性の生き方を中心に—」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第29号、2021年12月）で詳しく論じた。

図1,2,4,8,9,10,11,12：永井元編『永井ゑい子詩文』秀英舎、1929年（非売品）より

図3：Heathen Woman's Friend vol.XV（メソジスト監督派教会女性海外伝道協会機関誌）より

図5,7：青山学院資料センター所蔵原本より

寄稿エッセイ

[研究ノート] フランク・オハラ —「ストーンウォールの反乱」以前の詩人—

金田 由紀子

序：フランク・オハラ研究史から

ポストモダンのアメリカ詩人、フランク・オハラ (Frank O'Hara 1926-1966) は、ドナルド・アレン編纂の名詩選集『新しいアメリカ詩：1945年から1960年』(1960年)¹で脚光を浴びるようになった。戦後の前衛的な詩人たちを6つのグループに分けて提示し、新時代を開いた詩選集である。しかし、ニューヨークの美術界を牽引する美術評論家・キュレーターでもあったオハラは、抽象表現主義の画家たちを中心としたコテリー（特定の芸術家集団）では、1950年代から有名な詩人であった。

美術史家のドン・イェン・コウ (Dong-Yeon Koh) によれば、1990年代に、ゲイ／レズビアン・スタディーズとクィア・スタディーズが、文化史と批評史において明確な動向としてあらわれてきて、その影響もあり、オハラ研究が活性化したという²。コウは、フランク・オハラの本格的な伝記を書いたBrad Gooch (1994)³の他、批評アンソロジーを編集したJim Eldridge (1990)⁴、Alice Parker (1989)⁵、Geoff Ward (1993)⁶、Hazel Smith (2000)⁷の書籍をあげている。コウも取りあげるDavid Lehman (1998)⁸は、オハラの個人史を綿密にたどりながら詩を読み解いているが、オハラのセクシュアル・オリエンテーションに言及している⁹。

2000年代の出版では、例えば、Lytle Shaw¹⁰やRobert Hampton & Will Montgomery共同編集¹¹が、オハラのジェンダーとセクシュアリティの問題を深く掘りさげる重要な論考を含んでいる。2018年には初めての日本語モノグラフが出版されたが、著者の飯野友幸はオハラの詩“Homosexuality” (1954年作)¹²の精読と解釈を記した。画期的な業績である¹³。

1990年代以降のオハラ研究の一部をたどってみると、筆者が米国の大学院で教育を受けた1980年代前半のオハラ研究の動向とは隔絶の観がある。当時は、1977年にマジョリー・パーロフ (Marjorie Perloff) が初めてのオハラ研究モノグラフ¹⁴を出版した直後であり、研究者たちがオハラのポストモダニズム詩のスタイルを分析し独自の評価を書いていた¹⁵。1970年代からオハラのセクシュアリティに関心を払っている作家・研究者はいたが¹⁶、大学院ではオハラ研究の主要な論陣と認識されていなかったと記憶する。

こうした研究史を踏まえ、本論では、オハラと女性画家グレイス・ハーティガン (Grace Hartigan 1922-2008) との創作上の協力関係に注目した。ハーティガンは、1950年代にオハラと最も深い親交があった画家のひとりであり、1952年にはオハラとハーティガンによ

る共同作品、12点の連作油彩画、*Oranges*が誕生している。彼女はニューヨーク時代に、エネルギーが充満した油彩画を創造し成功した芸術家である。ある評論家は、ハーティガン「若い頃のイングリッド・バーグマンのような快活さと美貌、理路整然としたフェミニストの頭脳をもっていた」と述べている¹⁷。

ジェンダーとセクシュアリティが一種の「インターフェイス」(境界・接点)¹⁸の役割を果たし、「フェミニスト」ハーティガンと「ゲイの詩人」オハラが共同で創造したのが、12シリーズの絵画*Oranges*である¹⁹。抽象性の高い12キャンバスに、オハラの詩の言葉が不規則に散りばめられた難解な作品ではあるが、オハラのジェンダーとセクシュアリティに関する意識が表現された初期の重要作品である。

オハラとハーティガンの関係について先行研究は種々出版されているが(既出のOlsenとDiggoryを含む)、本論は、作品そのものの解釈を競うものではない。オハラとハーティガが生きていた時代状況や文化環境を中心に構成し、詩人と画家の共同作品*Oranges*創造の背景をオムニバスのように記述して、1950年代ニューヨークにおけるジェンダーとセクシュアリティをめぐる時代思潮の一端を伝えるのを目的としている。

1: フランク・オハラの経歴概略²⁰

1926年にメリーランド州のボルティモアで生まれ、翌年からマサチューセッツ州内陸のグラフトンで育った。1941年から44年までボストンのニューイングランド音楽学校で特待生としてピアノを学ぶ。1944年から1946年まで、駆逐艦USS *Nicholas*に水測3等兵として搭乗し、ノーフォーク(Va)とカリフォルニアに駐屯し、南太平洋と日本に航海した。1946年から1950年までハーヴァード大学で学び音楽から英文学へと専攻を変えて、BA学位を取得した。1950年から1951年までミシガン大学大学院に在学し修士号を取得。Hopwood Award(創作賞)を受賞する。

1951年秋、マンハッタン区東49丁目のアパートでニューヨーク生活を開始し、ニューヨーク近代美術館(MoMA)の受付(the front desk)として働き始める。*Art News*の編集スタッフになり、展覧会評や美術記事を書いた期間(1953年から1955年)のあと、1955年から1966年の最後の時まで、ニューヨーク近代美術館でキュレーターとして企画と展示の仕事に従事した。1965年Associate Curatorに就任。1966年7月24日ファイア・アイランドで事故にあい翌日に亡くなる。享年40歳。

音楽に始まり、文学と美術を軸足にして、映画にも夢中になり、芸術に生きた人生であった。しかし、芸術のための芸術(art for art's sake)はオハラの信条ではない。むしろ、T.S.Eliotに代表されるモダニズム詩では否定されがちであった、詩人自身の個我・内面・人生を、新しいスタイルの詩に復活させようとした詩人であった。詩人オハラにとって、セクシュアリティの表現は彼の精神生活の要であったと思われる。

2：フランク・オハラが生きた時代：マッカーシズム・冷戦・「ストーンウォールの反乱」

1950年代のニューヨークは、第2次世界戦で勝利した高揚感にあふれ、各ジャンルの芸術活動が盛んな都市であった。しかし、共産主義者を弾圧したマッカーシズムが吹き荒れた都市でもあり、同性愛者も弾圧されていた。反共主義の中心人物ジョセフ・マッカーシー上院議員は1954年に上院で譴責決議を受けたが、冷戦は続き、同性愛者への抑圧と差別もやむことはなかった。

画家のラリー・リヴァース (Larry Rivers 1923-2002) は、オハラの生涯にわたる友人であり、ある期間はオハラの愛人でもあったが、彼の自伝の中で、マッカーシー旋風におびえた体験を語っている。自分は「ユダヤ人」であり、明確な証拠がなければ「共産主義者」ということにされてしまいかねないと「繰り返し被害妄想の空想」に襲われ、尋問される場面さえ浮かんだと述べている²¹。

オハラの習作時代 (1950年代前半) には、「神経症的な苦悩と外部からの圧力に押しつぶされて解放されない自我の苦悩」や「外界からの刺激を一種の攻撃のように感じ」主体的に反応できない内面的な詩が時々書かれている。これらを自己表出の適切な言葉を発見できない詩人の詩作上の悩みの隠喩と読みとることもできよう。しかし、彼の親友たちや近親者の証言を参照すれば、これらの詩は1950年代前半の政治・社会状況の暗黒面に精神生活を脅かされていたオハラの心象風景の表現と考えられる²²。

オハラ没後3年目、1969年6月28日深夜、ゲイ解放運動史に刻まれた歴史的な抵抗事件、「ストーンウォールの反乱」(“the Stonewall uprising”) が勃発した。ゲイによる権利獲得運動は、それ以前も20年間続けられていたが、この事件を出発点にゲイの権利獲得運動が明確な形を成すようになったと言われている。その日、警察がこのバーを突然に襲撃したが、その本当の理由は、酒類販売の問題ではなく同性愛者の逮捕であることは、客たちには明らかであった。IDを持っていない者、店の従業員、トランヴェスタイト (異性装者) が、警察の用意したトラックに押し込められようとしていたが、逮捕されかけた人々は強い抵抗をし、乱闘事件になり、他の群集も加わり、抵抗運動は数日間続いた。

ニューヨークでは、古くから一定数の同性愛者たちが自分たちのコミュニティを形成していたが、一般のニューカーには見えにくい存在であった。同性愛者だとわかると、「嫌がらせ、逮捕、恐喝、失業、暴力」の被害にあうので、身を守るために、隠れていたからである。当時のニューヨークには、同性愛者たちが「出会い、飲酒をし、交流し、ダンスをして、リラックスする場所」があったが、グリニッチ・ヴィレッジのストーンウォール・インもそのような場のひとつであった²³。

ストーンウォール事件以前に書かれた詩、オハラの“Homosexuality” (1954年執筆：1970年初出版 CP p.531) は、「ぼくたちは仮面をはずしても、口を閉ざしたままでいようか？ まなざしに射抜かれてきたかのように」と始まる22行の詩である。「ホモセクシュアル」たちが集まる秘密の場所—14丁目・53丁目・公園・駅と列举し、詩人もそのコミュ

ニティで息を付いていると告白しているかのような詩である。オハラは、一般社会に対して、少なくとも1950年代には、「隠れていた」詩人であったと考えられる。

1971年に出版された『フランク・オハラ全詩集』（CP）には、“Homosexuality”が収められている他、“queertalk”（「同性愛者の隠語」）が散見されるため、この出版は「詩の世界のみならず、ゲイ解放においても、重要な出来事であった」とStuart Byronは述べている。例えば、オハラの詩論“Personism”（1959年作）（CP 498-99）中の有名な一文、「ズボンを買う時は、誰でもきみとベッドに入りたくするような身体にぴったり合ったズボンを買いたい」を、Byronは“queertalk”として挙げている。詩の永遠の命題であるart & life（人生と芸術＝内容と形式）の関係はいかあるべきかという問いに対して、ユーモア・皮肉・官能性を込めたレトリックを駆使し、内容をぴったりと表す文体（スタイル）で詩を書きたいと宣言したものである。また、Byronは、ラリー・リヴァースに向けて書いたオハラの詩「港湾長へ」（“To the Harbormaster”1954年作 CP p.217）を、20世紀アメリカの愛の詩として、一二を争うすばらしい一篇だと述べて、この詩を読み解いている²⁴。

3：抽象表現主義：詩人が絵画に求めたもの

詩人オハラがなぜ美術に強い関心を持ったか、彼の詩に美術がどう反映されているか、詩人のジョン・アッシュベリ（John Ashbery 1927-2017）は次のように述べている。「オハラ詩作の最初4・5年は、つまり、1947年頃から1952年までは、オハラのテスト期間であった」が、多少の例外をのぞいて、「フランクが本能的に求めていた言わば自由な表現の土台のようなもの」、つまり、彼の詩作のモデルは存在しなかった。自然のなりゆきとして、オハラは、「もっと深淵な」実験が行われている「他の芸術ジャンル」に目を向けるようになり、そのひとつがアメリカ絵画である。アッシュベリが指摘する1947年から1952年といえは、抽象表現主義絵画の勃興期・隆盛期である。美術評論・キュレーター職・交友関係の面から、オハラは、抽象表現主義美術に「かなり取り込まれてしまい」、「抽象表現主義が彼の人生を覆いつくした」とさえ言える。その見返りとしてオハラがこの画家たちから習得したのは、ガートルード・スタインが考えた（スタインにもピカソにも当てはまる）創造的思考にも似た、「プロセスを表す芸術の概念」であった。以上、フランク・オハラを最もよく知る詩人アッシュベリの証言である（“Introduction,” CP, p.viii-ix）。

抽象表現主義といえば、ジャクソン・ポロック、ウィレム・デ・クーニング、マーク・ロスコ等、第1世代と呼ばれる画家たちが脳裏に浮かぶかもしれない。抽象表現主義の旗手であり英雄であったポロックは、オハラにも無視できない芸術家であった。しかし、美学的にも、人間的にも、オハラが本当に深い関係を結んだのは、第2世代抽象表現主義の画家たち、ラリー・リヴァース、グレイス・ハーティガン、ジョアン・ミッチェル、ジェイン・フライリカー等である。ポロックに代表される抽象性の高い画面を残しながら、具体的な形象（イメージ）をキャンバスに復活した画家たちである。

4：共同作品 *Oranges*

アッシュベリがいう「プロセスを表す芸術」は、本論のテーマ作品、絵画*Oranges*にも見てとれよう。オハラの主要な美術評論であり抽象表現主義第2世代擁護論でもある「自然と新しい絵画」(“Nature and New Painting”1954)では、ハーティガンの芸術を「包括のプロセス」と評している²⁵。絵画*Oranges*、例えばその第1作(No.1)(1952, oil on paper, 44.25 x 33.5 inches.)²⁶には、ポロックなど第1世代を思わせる、形象を成さない荒々しいbrushstrokes(筆跡)が画面全体を構成している中に、アイデンティの曖昧な人間像らしい漠然とした形が立ち現れている。オハラの詩“Oranges”(Part) 1 (CP, p.5)からの詩句が添えられているために、この人間像は、テスやオフーリアのような悲劇を背負った女性ではないかと暗示される。ハーティガンは、日常的な形象を一切葬り去って抽象画を創造したジャクソン・ポロックに絶大なる敬意を払い影響も受けていたが、ポロックの絵画世界とは異なる自分独自の世界を作りたいと、もがいていた。その結果、「断片であってもよいから」、「自分の人生周辺にあるものを[キャンバスに]付け加えなければならぬ」と考えるようになった²⁷。絵画*Oranges*シリーズ12点それぞれに茫漠と現れる曖昧なイメージ(具体的形象)は、ハーティガンの苦闘の賜物であり、それぞれの絵画の曖昧さをオハラの詩句が補い何かしらの意味を添えている。

オハラは“Oranges:12 Pastoral”と題した12連作の散文詩を1949年に書いていたが(CP p.519)、オハラの提案により²⁸、ハーティガンの絵画と共同制作することになり、1953年にティボー・デ・ナジ画廊で展示した。以下のサイトには、No.5の絵画が提示されている。

<https://www.tibordenagy.com/exhibitions/tibor-de-nagy-gallery-painters-and-poets?view=slider#30>

(GRACE HARTIGAN and FRANK O'HARA, Oranges no. 5, 1952. Oil on paper, 44 1/2 x 35 inches. Marie-Helene and Guy Weill Family Collection)

油彩画面と言語が融合した解明しにくい作品である。詩No.5には、「少女たちが洗濯干し庭に死体のように倒れている」という詩句があるが、絵画No.5には、ケンタウロスのカギ爪が描かれ、凌辱された女性たちが暗示されている。12詩を通して、傷つけられた女性のイメージがしばしば現れるが、それら女性たちは、「私」(詩人オハラのことか?)と重なって書かれている。オハラの詩“Oranges”には、ジェンダーの交錯(交換性)が認められる。

5：フェミニスト画家ハーティガン

抽象表現主義は男性画家による美術運動だと考えられがちだが、2016年にデンヴァー美術館が主催した美術展『抽象表現主義の女性たち』(*Women of Abstract Expressionism*)の

モノグラフでは、42名の抽象表現主義の女性画家たちを取りあげている。主催者側のキュレーター、Gwen F.Chanzitは、現在でも、美術市場では、女性画家の作品は男性画家の作品よりも評価が低い、一般社会ではジェンダー不平等であった1950年代において、抽象表現主義が女性画家たちに解放感を与え、キャンバスが唯一自律的にコントロールできる場になった、と述べている²⁹。

1950年代に最もパワフルであった女性画家ハーティガンは、「女性アーティスト」としての体験に関心があるというCindy Nemserに対して、「女性であることについて、余り考えたことはなかった。絵を描くのがどんなに難しいかだけを考えていた」と切り返す。インタビューを受けた1971年の時点で、ハーティガンは、1950年代の経験を「[女性]差別をされていると感じなかったし、また、[男性画家と]区別されているとも感じなかった」と述べている。しかし、ハーティガンは、「女性画家」に対する偏見を次のようにも述べている。

C N：女性と感覚的なもの[“the sensuous”]を結びつけるのが、ステレオタイプな見方になっているのではないかしら。

G H：その通りよ。それこそが、私が絶対に抵抗したいことだったの。性差別的な含みを持たないで言葉を使っている意見というのを知りたいものだわ。

また、一度目の結婚で息子をもうけたハーティガンは、12歳の息子ジェフを父親の元において、画家で生きることを決意した。家族を捨てて南洋に行った画家のゴーガンは神話になったが、母親が子供を捨てると、「酷い母親」ということになる、とハーティガンは嘆いている³⁰。

6：伝説の画廊 ティボー・デ・ナジ

ハーティガンが否定したいと願ひ、また、完全には否定できなかった「ジェンダー差別」問題でしばしば取りあげられるのは、「ジョージ・」ハーティガンの名前である。イギリスの小説家ジョージ・エリオット、フランスの作家ジョルジュ・サンドを意識して、ハーティガンは、時々、グレイスの代わりに、ジョージの男性名を使い、または、G Hのイニシャルを使っていた。ハーティガンの伝記を書いたCathy Curtisによれば、ハーティガンの最初の4つの展示会の告知では、ジョージの名前を使っていたが、それら展覧会のレビューを書いた評論家たちは、執筆にはジョージの名前を出さなかった。しかし、ジョージとグレイスの2つの名前を使っていたために、ハーティガンは統合失調症的な症状が出たので、1955年には、グレイスだけを使うようになっていた。

ハーティガンが男性名ジョージを使っていた背景に関しては、1950年代前半にハーティガンの個展を主催したティボー・デ・ナジ画廊のディレクター、ジョン・B・マイヤーズ

と二人で考えたハーティガンは述べている。マイヤーズも実行していたゲイ・コミュニティのキャンプ的習慣の中に、お互いを有名女性の名前で呼び合うというものがあったので、そこからの発想だというのである³¹。

オハラとハーティガンが事実上出会った場所であるティボー・デ・ナジ画廊は、迫害を逃れてハンガリーから来た銀行家ナジ (Tibor de Nagy 1908-1993) が1950年にマンハッタンに開いた小さな空間であった。2011年に同画廊で開催された『画家たちと詩人たち』(Painters & Poets Tibor de Nagy) は、ここで出会って共同制作をした画家たちと詩人たちの作品回顧展である。第2世代抽象表現主義の画家たち、オハラやアッシュベリを含むニューヨーク派の詩人たちによる共同作品回顧展は、2011年当時、ニューヨークの間に興奮の渦を巻き起こした。アメリカが世界の美術中心地になり、文化的に大転換をとげた「黄金の時」1950年代を思い起こさせたからである³²。

同展覧会には出なかった一面であるが、当時のティボー・デ・ナジ画廊は、ジェンダーとセクシュアリティの点でも、異例に自由な場であったろうと想像できる。フェミニストのハーティガンと、ゲイ詩人と言われたオハラが出会い、共同制作の*Oranges*を展示した空間である。

結び

オハラは、ハーティガンを題名や主題にした詩を数点書いている。たとえば、1952年に書いた“Portrait of Grace” (CP pp.87-88) である。この詩では、オハラは、異彩を放つ美しい女性を観察するような書きぶりである。しかし、オハラはハーティガンへの敬意は持っていたであろうが、ふたりの関係は、もっと距離感のない、現実的な必要から生まれた「共闘関係」ではなかったかと思われる。お互いに切磋琢磨する芸術家であったと同時に、それぞれのジェンダーとセクシュアリティにおいて、社会から差別を受けている身であった。オハラもまた、「男性支配の異性愛主義社会の周縁」に生きていて、「ゲイの男性として、社会から女性のようなジェンダー役割 (“a feminine gender role”) を課され、それを外部から押しつけられたのみならず、その役割のために外部から疎外されていた」とDiggoryは述べている³³。

共同作品*Oranges*は、どちらのアーティストにとっても、試作期のマイナーな作品といえるかもしれない。しかし、オハラの側にとっては特に、ハーティガンの重要性を再認識させる作品である。名詩“In Memory Of My Feelings” (1956年作) (CP pp.252-57) は、グレイス・ハーティガンに捧げられている。この詩では、オハラ特有の詩のスタイルが確立しているわけだが、この詩に登場する多数の「自己」(“selves”) のジェンダーとセクシュアリティはどのようなものか、別稿において検討してみたい。

謝辞：本大学におけるスクーンメーカー記念ジェンダー研究センターの基礎を辛抱強く築いてくださいました旧青山学院女子短期大学の先生方、および幾多の困難を乗り越えてくださいました初代センター長の申恵丰先生に心より感謝いたします。

- 1 *The New American Poetry: 1945-1960*. Edited by Donald Allen (New York: Grove Press, Inc., 1960).
- 2 Dong-Yeon Koh, *Larry Rivers and Frank O'Hara: Reframing Male Sexualities in Art, Literature, and Culture of the 1950s* (Saarbrücken, Germany: LAP LAMBERT Academic Publishing, 2010), p.28.
- 3 Brad Gooch, *City Poet: The Life and Times of Frank O'Hara* (New York: Alfred A. Knopf, 1993).
- 4 Jim Elledge, ed., *Frank O'Hara: To Be True to a City* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1990).
- 5 Alice C. Parker, *The Exploration of the Secret Smile: The Language of Art and of Homosexuality in Frank O'Hara's Poetry* (New York: Peter Lang, 1989).
- 6 Geoff Ward, *Statutes of Liberty: The New York School of Poet* (New York: St. Martin's Press, 1993).
- 7 Hazel Smith, *Hyperscapes in the Poetry of Frank O'Hara: Difference, Homosexuality, Topography* (Liverpool: Liverpool University Press, 2000).
- 8 David Lehman, *The Last Avant-garde: the Making of the New York School of Poets* (New York: Doubleday, 1998).
- 9 *Ibid.*, pp.174-75.
- 10 Lytle Shaw, *Frank O'Hara: the Poetics of Coterie* (Iowa City: University of Iowa Press, 2006).
- 11 Robert Hampson & Will Montgomery, eds., *Frank O'Hara Now: New Essays on the New York Poet* (Liverpool: Liverpool University Press, 2010).
- 12 Frank O'Hara, *The Collected Poems of Frank O'Hara*, ed. by Donald Allen (New York: Alfred A. Knopf, 1971), rep. 1979, pp.181-82. 以後本詩集からの引用はCPと記し本文中に示す.
- 13 飯野友幸『フランク・オハラ：冷戦初期の詩人の芸術』（水声社 2018年），75-91ページ．
- 14 Marjorie Perloff, *Frank O'Hara: Poet Among Painters* (New York: George Braziller, 1977).
- 15 Charles C. Molesworth, "The Clear Architecture of the Nerves: The Poetry of Frank O'Hara", *The Iowa Review* 6 (3-4), 1975, pp.61-74; Charles Altieri, "Varieties of Immanentist Experience: Robert Bly, Charles Olson, and Frank O'Hara," in *Enlarging the Temple* (Cranbury, NJ: Associated University Presses, 1979), pp.78-127等.
- 16 例として、Rudy Kikel, "The Gay Frank O'Hara," *Gay Sunshine* 35 (Winter 1978). Jim Elledge, ed., *Frank O'Hara: To Be True to a City*, pp.334-349に再録.
- 17 Douglas Crase, "Hidden History of the Avant-Garde," in *Painters and Poets: Tibor de Nagy*

- Gallery* (New York: Tibor de Nagy Gallery, 2011), p.8. CraseはRoland Peaceの言葉を引用したものである。日本語訳は筆者による。なお、これ以降も、英文に対する日本語訳は、すべて筆者(金田)によるものである。
- 18 “interfaces”の用語はRedell Olsenのオハラ論でも使用しているが、Olsenは全く別の文脈と意味でこの用語を用いている (Redell Olsen, “Kites and Poses: Attitudinal interfaces in Frank O’Hara and Grace Hartigan”, in *Frank O’Hara Now*, ed.by Hampson and Montgomery, pp.178-194).
- 19 本作品の解釈には、Terence Diggory “Questions of Identity in *Oranges* by Frank O’Hara and Grace Hartigan,” in *Art Journal*, Winter1993, 52, 4, pp.41-50が非常に参考になった。
- 20 詳細は、CP, pp.13-16.本論にはその抜粋を拙訳により取りあげた。
- 21 Larry Rivers with Arnold Weinstein, *What Did I Do? : the Unauthorized Autobiography* (New York: Harper Collings Publishers, 1992), pp.311-12.
- 22 金田由紀子「詩と絵画の交響：一フランク・オハラとニューヨーク派の美術」『比較文学』41号(日本比較文学会 1999年), 23-24ページ。
- 23 以上、ストーンウォール関係は、以下の文献を参照：“‘Gay is Good’: The Rise of Gay Power,” written by Steven H. Jaffe, *Activist New York : A History of People, Protest, and Politics* (New York: Washington Mews Books, 2018), pp.212-16.
- 24 Stuart Byron, “Frank O’Hara: ‘Poetic Queertalk,’” in *Frank O’Hara: To Be True to a City*, ed. Jim Elledge, pp.64-69. (Reprinted from *Real Paper*, 24 April 1974,20-21.)を参照。
- 25 Frank O’Hara, “Nature and New Painting,” in *Standing Still and Walking in New York* (New York: Grey Fox, 1981), p.45.
- 26 *Oranges* No.1の図は、Terence Diggory, pp.44-45を参照。
- 27 Cindy Nemser, *Art Talk : Conversations with 15 Women Artists*. Revised and Enlarged Edition (Icon Editions, 1995), pp.134-35.
- 28 Terence Diggory, p.42.
- 29 Gwen F.Chanzit, “Introduction to the exhibition,” in *Women of Abstract Expressionism*, ed.by Joan Marter (Denver: Denver Art Museum,2016),p.10.
- 30 以上Nemserとの対談からの引用は、Cindy Nemser, *Art Talk*, pp.128-29; p.130; p.134; p.132.
- 31 上記2つのパラグラフは、Cathy Curtis, *Restless Ambition : Grace Hartigan, Painter* (Oxford : Oxford University Press, 2015), pp.73-75を要約。
- 32 金田由紀子「伝説の画廊ティボー・デ・ナジ：抽象表現主義と詩人たち」『週刊ニューヨーク生活』(ニューヨーク：NY生活プレス社), 338号(2011年2月26日), 30ページ。
- 33 Diggory, p.46.

調查報告

青山学院法人役員および青山学院大学教員の ジェンダー・バランスの現状

寺尾 敦

1. はじめに

研究者での女性割合の低さなど、高等教育でのジェンダー・バランスの不均衡が指摘されている^[1-4]。内閣府男女共同参画局がまとめた『令和3年版 男女共同参画白書』^[5]は、「令和2年度男女共同参画社会の形成の状況」の第5章第1節「教育をめぐる状況」において、文部科学省の「学校基本統計」および「学校教員統計」に基づき、

- 女子の大学（学部）への進学率は平成期を通じて大きく上昇したが、なお、男子より低く、理学、工学で女子学生割合が特に低い等、専攻分野によって男女の偏りがある。
- 高等学校への進学率は、ここ数年間わずかに低下し、大学院への進学率は10年来低下傾向にある。
- 専門職学位課程への社会人入学者に占める女子学生の割合は、修士課程への社会人入学者に占める女子学生の割合に比べて低い。
- 教員に占める女性の割合は、教育段階が上がるほど、また上位の職になるほど低い傾向があるが、短期大学は教員に占める女性の割合が他と比べて高い。

と述べている。続いて、第5章第2節「研究分野における男女共同参画」では、総務省の「科学技術研究調査」に基づき、

- 研究者に占める女性の割合は緩やかな上昇傾向にあるが、令和2（2020）年3月現在で16.9%と、諸外国と比べて低い。
- 研究者の大半を占める工学・理学分野の女性研究者割合が特に低い。

と述べている。

本稿の目的は、2022年2月1日時点の、青山学院法人役員（執行部、役員、評議員）、大学専任教員、大学役職員のジェンダー・バランスを把握することである。青山学院および青山学院大学のウェブサイトで公開されている名簿あるいは人数集計データを参照する。ジェンダー・バランスが不均衡ではないかと考えられる点は指摘するが、不均衡であるかどうかの判断は難しい。まずは客観的な数値である男女比を把握し、ジェンダー・バランスについての議論につなげたい。

2. 法人役員におけるジェンダー・バランス

青山学院のウェブサイトでは、法人執行部、役員（理事、監事）、評議員の名簿が公開されている^{〔6〕〔7〕}。2022年2月1日に参照した時点では2021年7月12日現在の情報が提示されている。本稿の付録に、〔7〕より作成した役員等名簿を示す。

法人執行部は、理事長（1名）、常務理事（4名）、常任監事（1名）、院長（1名）、副院長（1名）、総局長（1名）の9名で構成されている。いずれも男性である。

法人役員は、理事19名、監事2名、評議員48名で構成されている。理事19名は全員が評議員でもある。理事19名のうち女性は1名（前田美智子）、幹事は2名とも男性、評議員48名のうち女性は4名（末田清子、石橋エリ、前田美智子、向山康子）である。

法人執行部および法人役員はほとんどが男性で占められていることがわかる。法人執行部での女性割合は0.0%、法人役員での女性割合は、理事5.3%、監事0.0%、評議員8.3%である。

法人執行部および法人役員のジェンダー・バランスは不均衡と言えるかもしれない。法人執行部および法人役員となる資格のある、潜在的な候補者母集団での男女比は不明だが、女性の絶対的な人数はかなり多いはずである。たとえば、評議員の選任区分には校友があり、法人ウェブに掲載されている2021年7月12日現在の情報では、13名（女性2名）がこの区分である。校友会の規模は非常に大きいので、女性の候補者もかなりの人数に上る。もう少し積極的に女性を選ぶことは難しくないだろう。

3. 学部専任教員のジェンダー・バランス

青山学院大学のウェブサイトでは、組織および教職員に関する情報を公開している^{〔8〕}。専任教員のジェンダー・バランスを、学部の職位・男女別教員数（2021年5月1日現在）^{〔9〕}に基づいて調べる。このデータから作成した学部・学科の男女別専任教員数を表1に示す。

大学全体での専任教員数は、男性が422名、女性が152名であり、全教員に占める女性教員の割合は26.5%である。『令和3年版 男女共同参画白書』^{〔5〕}によれば、令和2（2020）年3月31日現在、日本の研究者に占める女性の割合は16.9%である（白書 I -5-6図）。この割合は所属機関によって違いがあり、大学等（学部、短期大学、高等専門学校、大学附置研究所及び大学共同利用機関など）での女性研究者の割合は27.8%である（白書 I -5-8図）。本学での女性専任教員の割合は国全体の状況とほとんど同じである。

女性教員の割合は学部によってかなり異なる。最も低いのが理工学部の8.0%（男性126名、女性11名）、最も高いのが教育人間科学部の45.8%（男性26名、女性22名）である。『令和3年版 男女共同参画白書』^{〔5〕}では、大学等での分野別の女性研究者の割合が示されている（白書 I -5-9図）。本学の各学部に対応する分野での女性割合は、人文科学37.5%、社会科学26.3%、理学15.1%、工学11.9%、その他（心理・家政など）41.9%となっている。

融合系学部では困難があるが、これら全国的な割合と、本学の各学部の女性教員の割合を比較してみる。女性教員の割合が比較的高い学部として、法学部（40.0%）、総合文化政策学部（41.7%）、地球社会共生学部（36.0%）が挙げられる。教育人間科学部（45.8%）とコミュニティ人間科学部（43.6%）は、女性教員割合が絶対的に高いが、人文科学あるいはその他分野（心理学を含む）での全国的な割合と同程度である。女性教員の割合が比較的低い学部として、経済学部（17.0%）と経営学部（16.7%）が挙げられる。理工学部は絶対的な割合としては低い（8.0%）、理学あるいは工学分野での全国的な割合と比べて著しく低いわけではない。社会情報学部での女性教員割合（16.1%）は、社会科学分野の全国的な割合よりも低い、工学分野での全国的な割合よりは高い。

大学等での全国的な女性教員の割合は、本学の学部教員のジェンダー・バランスを判断する基準として、あまり適切ではないかもしれない。『令和3年版 男女共同参画白書』^[5]では、研究者に占める女性の割合は緩やかな上昇傾向にあるが、諸外国と比べて低いことが指摘されている。国際的な視野でジェンダー・バランスを考えることが必要であろう。

表1 学部・学科の男女別専任教員数（2021年5月1日現在）

学 部	教 授		准教授		助 教		女性割合 (%)
	男	女	男	女	男	女	
文学	43	21	11	9	1	1	36.0
教育人間科学	21	11	3	6	2	5	45.8
経済学	31	7	6	1	2	0	17.0
法学	21	13	4	5	2	0	40.0
経営学	35	5	5	3	0	0	16.7
国際政治経済学	23	8	8	4	0	1	29.5
総合文化政策学	12	5	2	2	0	3	41.7
理工学	60	3	17	2	49	6	8.0
社会情報学	18	1	6	2	2	2	16.1
地球社会共生学	12	4	3	1	1	4	36.0
コミュニティ人間科学	13	8	9	9	0	0	43.6
合計	289	86	74	44	59	22	26.5

Note. 女性割合は教授、准教授、助教をあわせて計算されている。

青山学院大学ウェブサイトで公開されている学部の職位・男女別教員数より作成

https://ac.cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2021/05/aa_number_kyoin_undergraduate.pdf

4. 大学役職員のジェンダー・バランス

大学執行部を含む役職員のジェンダー・バランスを、役職員の名簿（2021年5月1日現在）^[10]に基づいて調べる。

大学執行部は、学長1名、副学長3名、学長補佐3名の7名で組織されている。いずれ

も男性である。執行部が男性に偏っているかどうかを判断するため、執行部7名を教授375名（男性289名、女性86名）からくじ引きで選ぶことを考える。つまり、性別に関係なく、どの教授も等しい確率で執行部に入ると仮定する。このとき、全員が男性となる確率は $\frac{289}{375} \times \frac{288}{374} \times \dots \times \frac{283}{369} = 0.159$ である。極端に低い確率ではないが、執行部7名全員が男性というのは、やや偏っていると見てよいだろう。

学部長（研究科長を兼任する）11名のうち、女性は2名（法学部と国際政治経済学部）である。学部によって教員の男女比が異なるため、学部長のジェンダー・バランスを判断することは難しい。学部ごとの男女比の違いを無視して、どの学部も確率 $\frac{289}{375}$ で男性教授が学部長に選ばれと仮定してみる。各学部の結果は独立であるとする。そうすると、11学部での男性学部長の数は2項分布に従うので、9名以上が男性（つまり、女性が2名以下）となる確率は0.521である。この仮定では女性学部長の数が2人以下となることは珍しくなく、学部長のジェンダー・バランスが不均衡であるとは言えない。

表2 学部および研究科の男女別主任数（2021年5月1日現在）

学部・研究科	学科主任・教務主任		専攻（専攻教務）主任	
	男 性	女 性	男 性	女 性
文学	3	3	3	2
教育人間科学	2	1	2	0
経済学	3	0	2	0
法学*	2	0	2	1
経営学	3	0	1	0
国際政治経済学*	3	1	2	1
総合文化政策学	1	1	2	0
理工学	8	0	9	0
社会情報学	2	0	2	0
地球社会共生学	1	1		
コミュニティ人間科学	2	0		
国際マネジメント			4	0
会計プロフェッション			2	1
合計	30	7	31	5

Note. 学部・研究科名に付されている*は学部長・研究科長が女性であることを示す。

青山学院大学ウェブサイトで公開されている役職員名簿より作成

http://www.aoyama.ac.jp/wp-content/uploads/2021/05/aa_info-staff.pdf

学部の主任（学科主任と教務主任）、および、大学院の主任（専攻主任あるいは専攻教務主任）の男女別人数を表2に示す。いくつかの学部では主任のジェンダー・バランスが不均衡であるように見えるが、教員の男女比が学部によってかなり異なるためと、主任の数がそれほど多くないため、主任の選び方にバイアスがあると簡単には言えない。たとえば、理工学部は8名の学科主任・教務主任が全員男性であるが、専任教員の男女比（主任

にならない助教を除く) が77:5であるから(表1)、このように男性に偏ることもやむを得ないかもしれない。くじ引きで主任を選ぶ場合、8人全員が男性となる確率は $\frac{77}{82} \times \frac{76}{81} \times \dots \times \frac{70}{75} = 0.590$ であり、かなり高い。

主任の選び方にバイアスがあるとは簡単には言えないが、ジェンダー・バランスを考慮して、女性主任をもっと積極的に選ぶことは行ってよいかもしれない。

5. まとめ

青山学院および青山学院大学のウェブサイトで公開されている名簿あるいは人数集計データを参照して、2022年2月1日時点の、青山学院法人役員(執行部、役員、評議員)、大学専任教員、大学役職員のジェンダー・バランスを調べた。その結果は以下のようにまとめることができる。

- 青山学院の法人役員(執行部、役員、評議員)はほとんどが男性であり、ジェンダー・バランスが不均衡であると考えられる。
- 大学専任教員の男女比は学部によってかなり異なる。人文科学、社会科学、理工学といった分野の違いを考慮して、大学等での全国的な女性教員の割合と比較すると、いくつかの学部は女性教員の割合が相対的に高く、いくつかの学部は相対的に低い。
- 大学執行部7名はすべて男性であり、やや男性に偏っていると考えられる。
- 学部長11名のうち女性は2名だけであるが、ただちにバランスを欠いているとは言えない。
- 学部および大学院の主任は男性の割合が高いが、ただちにバランスを欠いているとは言えない。

ジェンダー・バランスが不均衡であるかどうかの判断は難しい。まずは客観的な数値である男女比を把握し、ジェンダー・バランスについての議論につなげたい。

引用文献

- [1] 福岡県立大学坂無研究室 高等教育におけるジェンダー・バランスの不均衡とその是正に関する実証研究
<http://genderhe.jp/about.html> (2022年2月1日アクセス)
- [2] 坂無淳 (2018) 日本の高等教育と科学技術におけるジェンダー政策—男女共同参画基本計画と科学技術基本計画を中心に— 福岡県立大学人間社会学部紀要, 26 (2), 19-35.
- [3] 坂本辰郎 (2003) 大学教育におけるジェンダーの問題 教育学研究, 70 (1), 17-28.
- [4] 日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会 (2015) 科学者コミュニティにおける女性の参画を拡大する方策
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t216-1.pdf> (2022年2月1日アクセス)
- [5] 内閣府男女共同参画局 (2021) 令和3年版 男女共同参画白書
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/index.html
 (2022年2月1日アクセス)
- [6] 青山学院 (2021) 法人執行部、役員 (理事、監事)、評議員、各学校役職者
<https://www.aoyamagakuin.jp/introduction/data/post.html> (2022年2月1日アクセス)
- [7] 青山学院 (2021) 私立学校法第47条に基づく「学校法人青山学院 役員等名簿」
https://cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2021/07/post_20210712.pdf
 (2022年2月1日アクセス)
- [8] 青山学院大学 組織、教員に関する情報
<https://www.aoyama.ac.jp/outline/information/faculty/> (2022年2月1日アクセス)
- [9] 青山学院大学 (2021) 学部の職位・男女別教員数
https://ac.cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2021/05/aa_number_kyoin_undergraduate.pdf (2022年2月1日アクセス)
- [10] 青山学院大学 (2021) 役職員
http://www.aoyama.ac.jp/wp-content/uploads/2021/05/aa_info-staff.pdf
 (2022年2月1日アクセス)

付録

学校法人青山学院 役員等名簿 (2021年7月12日現在)

女 性	役 職	氏 名	法人執行部	大学執行部
	理事・評議員	山本 与志春	院長	
		堀田 宣彌	理事長	
		シュエ土戸 ポール	副院長	
		石黒 隆文	総局長	
		鶴飼 眞	常務理事	
		桑原 一利	常務理事	
		薦田 博	常務理事	
		楯 香津美	常務理事	
		阪本 浩		学長
		稲積 宏誠		副学長
		内田 達也		副学長
		渡辺 健		
		小路 明善		
		関根 茂		
*		前田 美智子		
		原 啓		
		高橋 潤		
		井阪 隆一		
		石井 登		
	監事	鈴木 豊	常任監事	
		石原 修		
	評議員	小西 範幸		副学長
		河見 誠		
*		末田 清子		
		茂 牧人		
		宮川 裕之		
		升本 潔		
		中里 宗敬		

女 性	役 職	氏 名	法人執行部	大学執行部
		馬場 俊和		
		上野 亮		
		中村 貞雄		
*		石橋 エリ		
		市瀬 和敏		
		紀 正尚		
		木村 文幸		
		黒沼 健		
		崎田 克巳		
		高橋 克典		
		藤田 晋		
		宮 直仁		
*		向山 康子		
		山田 忠		
		稲村 広志		
		小林 和夫		
		朝野 圭三		
		長瀬 茂		
		REEDY,David W.		
		長山 信夫		
		太田 幸洋		
		田中 穎穂		

Note. 第1列「女性」の*は女性であることを示す。

私立学校法第47条に基づく「学校法人青山学院 役員等名簿」より作成

https://cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2021/07/post_20210712.pdf

執筆者（掲載順）

小檜山 ルイ	東京女子大学現代教養学部 教授
大森 秀子	青山学院大学教育人間科学部 教授
小林 瑞乃	青山学院大学コミュニティ人間科学部 准教授
金田 由紀子	青山学院大学経済学部 教授
寺尾 敦	青山学院大学社会情報学部 教授

青山学院大学
ジェンダー研究センター年報 第 1 号

2022 年 3 月 20 日 発行

編集発行：青山学院大学附置
スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター
センター長 申 恵丰

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

印 刷 ：株式会社双文社



地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
青山学院スクール・モットー